



はじめに

金沢のまちを藩政期から明治維新、戦後復興、そして現在まで支えてきたものの一つが「工芸」です。なぜ他でもなく、工芸なのか？

本冊子は、2021年11月26・27・28日に開催される「金沢21世紀工芸祭2021 土に紐づく工芸のポリティクス」を、より楽しむために特別編集された冊子です。

冒頭の疑問を発端に、工芸を支えてきた行政、教育期間、そして市井の人々に注目しながらまちの記憶を読み解き、「工芸」がどのように変化してきたのかを、本冊子と3日間のイベントを通じて見つめ直します。イベントでは【工芸回廊】、【趣膳食彩】、【金沢みらい茶会】、【金沢みらい工芸部】以上4つのコンテンツを期間中3日間金沢市内・オンラインで開催します（P56参照）。

藩政期から現在まで続く歴史や工芸の支え手を知る1つの補助線として、お楽しみ頂ければ幸いです。



はじめに

02

1 なぜ金沢は他でもなく工芸なのか？

金沢の工芸の歴史
殉職産業と美術工芸——本廉宏史
「職人」から「工芸家」へ——榎本佳
近代数寄者と工芸
お茶って何？

09 10 12 20 24 28

2 現場の人はどう働いているのか？

陶芸・ガラス作家を支える 沢田滋（共栄セラミック）
作家を支援する 新木伊知子（金沢クラフトビジネス創造機構）
現場を支える 中野正啓（チカダ株式会社）×坪田健二（坪田電機株式会社）
工芸家の職人しごと／工芸を支える加賀指物——青木小波

35 36 40 44 47

3 平成以降の工芸

平成以降の金沢の工芸と政治の近現代史——山崎達文
金沢拠点陶芸家アンケート2021

49

4 金沢21世紀工芸祭2021

概要
趣膳食彩＜color＞ 浅田久太（浅田屋）×石黒太朗（石黒商店）
趣膳食彩＜color＞ 大友佐俊（大友楼）／鏑正美（つば甚）
趣膳食彩＜color＞ 山本幸雄（山本清芳堂）
工芸タイムトラベル
金沢21世紀工芸祭2021MAP

57 58 60 63 65 68 70

参考文献

72



野々村仁清
《色絵雄香炉》17世紀
石川県立美術館蔵
1951年、国宝認定。
近代数寄者の山川庄太郎氏*が石川県立美術館に寄贈したもの。
*p24参照



上／粉引茶碗
銘《楚白》
石川県立美術館蔵

右／《色絵鹿図呉須赤
絵写鉢 春日山窯》
19世紀
石川県立美術館蔵

卯辰山にて開窯した、春
日山窯で作られた呉須
赤絵写の典型的な作。

3代前田利常愛用の茶
碗として加賀前田家に
伝来。県指定文化財。



1 なぜ金沢は他でもなく工芸なのか？

金沢が「工芸王国」と呼ばれるようになった所以、

その歴史を振り返ろう。

藩政期から明治、大正、昭和、平成という時代の変遷と連動し、

政治や教育機関、市井の人々による

工芸を支える諸活動があったことを。

紫陽花／アジサイ



金沢と工芸の歴史

おさらい編

金沢市が工芸とどう関わってきたのか。
時代の大きなうねりと合わせ、江戸時代から2021年まで段階的にみていこう。

加賀藩におけるものづくりの奨励

士族没落、人口減少、殖産興業と美術工業

近代・産業化の模索、軍都

産業と文化で揺れる都市づくり

工芸を軸とする文化政策の展開

年度	国内の出来事	金沢の美術行政	金沢市内の動き
慶長	江戸幕府設立	二代藩主利常、御細工所を工房へ転換 四代藩主綱紀、書物奉行・茶道奉行を設置 裏千家四代・千仙受宗室を茶道奉行として招く	初代大樋長左衛門、大樋村で開窯 青木大木、春日山窯開窯（八二〇廃窯） 武田民山、民山窯開窯（八四四廃窯）
1659			
1666			
1807			
1822			
1863	明治維新	十二代藩主齊広が竹沢御殿建立、庭を兼六園と名付ける 成業閣完成	
1868			
1869			
1871	廃藩置県	廃藩置県により金沢県へ 県庁・美川へ・金沢町区開拓所設置	加賀藩土阿部碧海、古寺町に九谷焼給付工場を興す（一八七八） 旧加賀藩土前田肇久田宗玄、美川合町に開窯 光仙窯開窯 成業閣で「美術工業品展」初開催 裏千家十一代玄々斎精中、三ヶ月間金沢に滞在
1872	裏千家が点茶盤を考案、京都博覧会で使用		
1875	跡見花嫁、学校教育の一部として点茶を取り入れる		
1876	麻刀令	兼六園内に金沢博物館開館	長谷川準也、銅器会社設立 工芸家有志による連池会設立 内海吉造、為詢社を開業 納實介二郎、陶芸指導に来県 金沢九谷陶器工同組合結成 金沢区工業学校現石川県立工業高校創立
1877	第一回内国勲業博覧会	石川県勲業試験場廃 「明治紀年之標」建立	
1880			
1882			
1887	東京美術学校開校	第四高等学校創設 金沢に市制がしかれる	
1889	第三回内国勲業博覧会にて美術工業が誕生		
1890			
1909	大正元年	第九師団の設置、金沢駅開業 金沢勲業博物館・石川県物産陳列館と改称 物産陳列館主催「新意匠展覧会」開催	月心寺で掛釜はじまる 井上馨来沢
1912	第一次世界大戦勃発		
1914			
1915			
1917	戦時利得税（成金税）		
1918			
1920	物産陳列館・石川県商品陳列所と改称・石川県工業試験場設立 金沢市主催「意匠図案講習会」初開催 金沢市意匠図案研究会 （現金沢市工芸協会）発足	北大路魯山人が細野燕台の招きで金沢を訪れる 大西陶磁器原料設立 金沢美術倶楽部発足	
1923	関東大震災		
1925	柳宗悦、民藝を発表		
1927	第八回「帝展」にて第四部美術工芸が追加		
1932			
1936			
1939	陸軍美術協会が創立 太平洋戦争開戦		
1941			
1942			
1945	終戦		
1946	「日展」初開催 日本国憲法施行 〈文化財保護法〉（相続税法策定朝鮮戦争勃発） 重要無形文化財保持者の認定開始 国立西洋美術館開館 高度経済成長期はじまる	「産業と観光の大博覧会」開催 商品陳列所廃止、石川県商品館へ・ 「大倉澤振興座談会」開催 「聖戦美術傑作展覧会」開催 「工芸作家、資格認定制」へ 「第一回買替美術展覧会」初開催 第一次石川県立美術館開館・ 石川県美術文化協会設立 金沢美術工芸専門学校開校 金沢美術工芸専門学校、短期大学へ昇格 金沢美術工芸短期大学、金沢美術工芸大学に昇格 石川県立美術館開館 新産業都市指定から漏れる・三八豪雪 〈金沢市長期計画〉徳田與吉郎市長 〈伝統環境の保存および美しい景観の形成に関する条例〉制定 金沢市立中村記念美術館開館・ 〈新長期計画〉岡良一市長 石川県立歴史博物館開館・ 〈金沢市基本計画〉江川昇市長	金沢九谷焼工業協同組合設立 都賀田勇馬、小松の洞窟で仏像群像の制作を開始 北陸工芸協会・郷土工芸・発刊 陶磁器製造業の配給統制と転業を図る協議会開催 旧北陸海軍館で「現代美術展」初開催
1947			
1950			
1951			
1955			
1959			
1963			
1964			
1968			
1975	〈文化財保護法〉改正 〈伝統的建造物群保存地区導入〉		
1986			
1989	平成元年・ベルリンの壁崩壊		
1990			
1995	阪神淡路大震災		
1996			
1999			
2004	ユネスコ、創造都市ネットワークを創設 アートフェア東京初開催		
2007			
2008	リーマンショック		
2009			
2010			
2011	東日本大震災		
2012			
2015	北陸新幹線、金沢まで開通		
2016			
2017			
2018	東アジア文化都市開催（金沢） 新型コロナウイルスによるパンデミック		
2020			

金沢市内の動き

金沢市が工芸とどう関わってきたのか。
時代の大きなうねりと合わせ、江戸時代から2021年まで段階的にみていこう。

加賀藩によるものづくりの奨励

加賀藩の歴代藩主は百万石の経済力を積極的に文化政策に投入した。



延宝年間金沢城下図
（金沢市立玉川図書館蔵）

士族没落、人口減少、殖産興業と美術工業

明治維新後、武士中心の社会から転換が進まず人口減少。殖産興業等により、産業の立て直しが図られた。一定の成果を収めたものの長続きしなかった。



「石川県金沢博覧場列品之図（1872年）」
石川県立歴史博物館提供

近代・産業化の模索、軍都

第9師団など国の機関を金沢市に誘致し、再興を図った。軍都形成による需要はあったものの、大都市との距離もあり、近代工業化の影響は少なかった。また戦況の悪化にも関わらず産業振興のために「産業と観光の大博覧会」が開催された。



「産業と観光の大博覧会」
国立国会図書館ウェブサイト蔵

産業と文化で揺れる都市づくり

戦後の都市開発に準じ、「新産業都市」の指定を目指すも漏れ、開発の面で遅れを取る。国の施策に翻弄されながら、自ら美術大学や美術館整備、〈伝統環境保存条例〉などの文化施策を展開することとなる。



金沢美術工芸大学蔵

工芸を軸とする文化政策の展開

「世界工芸都市宣言」、そして「クラフト創造都市認定」に象徴されるように、金沢市は「工芸」を都市づくりの基軸として据えるようになる。工芸は美術なのか、産業なのか揺れ動きながらも、人材育成、製品開発、情報発信、販路拡大、普及推進など国の施策とは別に、金沢市による「工芸」支援制度は多岐にわたっている。



「クラフト創造都市・金沢」
シンボルマーク

殖産興業と美術工業

金沢星稜大学 本康宏史

1 明治維新と金沢の殖産興業

明治維新により幕藩封建体制が崩壊すると、各地の大名や家臣と深いかわりあいを持っていた地場の産業や文化は、パトロンとしての武家を失うことになり、多くは次第に衰退の方向を辿ることになる。加賀藩の城下町である金沢でも、最も打撃をうけたのは、前田家を中心とする武家の庇護・需要で成長してきた「加賀藩細工所」の工芸活動であった。そこで育成された「工芸」技術は、近世日本のなかでも有数

の水準にあったものといわれる。

加賀百万石の経済力は失われ、石川県は慢性的な沈滞状況に陥った。とりわけ金沢は、一時県都の座をも失うほどの衰退を余儀なくされ、急激な人口の減少と経済の衰退に喘ぐのである。こうした事態に対し、様々な殖産興業策（士族授産・地場産業の復興・近代工業の導入）が試みられた。例えば、江戸時代の物産会に端を発した博覧会は、近代に入ると「富国強兵」、ことに「殖産興業」の有効な手段として盛んになり、著しくその発達をみる。なかでも金沢は幕末維新期には江戸・京都・大坂の三都に次ぐ大都市であり、その

故か、博覧会の開催も他の地方都市に比べごく早い段階に試みられている。

まず、明治五年（一八七二）九月には、兼六園内で金沢博覧会が開催され、多くの伝統的工芸品が出品された。これが石川県における博覧会の出発点と位置づけられる。ついで七年六月には、兼六園及び東本願寺別院を会場として博覧会が開催され、七万二一三五人の入場者を集めた。兼六園会場のうち西館は旧異御殿（成異閣）の建物、東館はお雇外国人デッケンのために建築した異人館だった（デッケンは鉱山学教師）。さらに、明治九年（一八七六）開催の博覧会後には、このデッケン館と

旧異御殿とをあわせて金沢勸業博物館とした。一説には、常設の博物館は全国でも初めてのことであったとされる。こうした明治初期の博覧会を皮切りに、殖産興業期には、万国博覧会・内国勸業博覧会への参加をはじめ、数多くの品評会・共進会あるいは農談会が開催されたのである。

また、明治維新で職を失った細工所の職人らを救うため、明治五年（一八七二）、授産施設として金沢区方開拓所が設置される。翌六年には金沢区方勸業試験所、八年には区方勸業場、九年には石川県勸業試験場と次々に変遷しつつも、加賀象嵌、加賀蒔絵、加賀染、九谷焼など加賀の伝統工芸の保護育成にあたった。なお、明治十三年には、さきの勸業博物館の図書室に夜学室が開かれ、ここを拠点に「蓮池会」（図式考按競技会）が催され、工業デザイン研修の先駆的な役割を果たしたのである。このように、「工芸」を含む産業育成の努力が重ねられたのが、金沢の特色といえよう。

さらに、明治前期の工芸活動に力を与えたのは、「金沢銅器会社」の設立（明治十年二月）と「金沢工業学校」の開校であった。当時金沢町の総区長であった長谷川準也は、細工所などで働いていた金工職人を勸業場に集めて輸出用



兼六公園勸業博物館之図（成異閣）
石川県立歴史博物館蔵



兼六公園勸業博物館之図（工業学校）
石川県立歴史博物館蔵



東京国立博物館蔵「温知図録」図案
Image: TNM ImageArchives

の象嵌銅器を作らせ、海外輸出を試みている。これが成功をおさめたことをうけ、明治十年（一八七七）銅器会社を金沢の長町川岸に設立し、金工職人を集め積極的に輸出用象嵌銅器を作らせている。ここでは、水野源六や山川幸二らの藩政時代以来培われてきた最高技術が駆使されており、加賀象嵌技術の再生と伝承に果たした役割は、極めて大きいものがあつた。

一方、金沢工業学校（のちに石川県工

業学校）は、明治二十年（一八八七）に兼六園内にあつた勸業博物館を使用して開校。藩政期以来の伝統工芸を産業化することを目的として設置された。当時美術工芸を内容とする専門学校は、東京の工部美術学校や京都の美術学校などがあつたが、中等学校としては日本で

最初の施設であつた。初代校長納富次郎の教育理念と、初期の充実した講師陣によって、「明治美術工芸界の中枢的役割をつとめた」とも評されている。納富は佐賀藩出身の教育者・美術工芸家で、若いころ長崎に遊学、高杉晋作とともに上海へ密航した経験もある。明治六年（一八七三）ウィーン万国博覧会審査官として渡欧し、以後二年間ヨーロッパを視察。石川県とは、明治九年（一八七六）の殖産事業視察で関

係をもち、金沢工業を皮切りに富山工芸、香川工芸、佐賀工業学校の「四つの工芸・工業学校」を創設している。

2 「美術工業」の時代

一般に、殖産興業と呼ばれた政府の手による近代工業の移植は、三つのレベルで進められてきた。その第一は鉱物資源の開発と運輸通信網の整備で、主として工部省が担当した。第二は当時「輸入妨遏」と呼ばれたもので、外国から輸入していた製造品を国産化しようとするものであり、その典型は近代的な綿糸紡績業の設立であつた。第三は、生糸や茶や工芸品などの輸産業の奨励であつた。この第二、第三のカテゴリの殖産興業が内務省によって担当されたことも、よく知られているところである。こうした一八八〇、九〇年代にかけての「工芸品などの輸

出産業の奨励」とその展開過程を、近年、美術史のなかでは、「美術工業」という概念で検証する傾向がみられる。金沢の工芸品振興政策もこのキーワードからとらえることができる。

こうした「美術工業」の県下の動向を示す好資料が「石川県勸業年報」である。殖産興業政策の所轄官庁でもあつた農商務省が指示して、各府県横ならびで勸業の状況を調査したものである。石川県に関しては、明治十年（一八七七、第一回）から同三十一年（一八九八、第十九回）までの調査報告年報が残されている。例えば、『第三回年報』（明治十三年）の「工」の部の総論を瞥見してみると、「需要最も広く産出最も多キモノ四アリ、曰ク織物、曰ク漆器、曰ク陶器、曰ク銅器、是ナリ左ノ如シ」とあり、以下これらについての状況が「逐一」報告されている。この一事でも明らかのように、当時の石川県、なかならず金沢においては、「美術工業」の生産物が工産品の主体をなしていたのである。そして、主にこう

した「四つの産物」を複合的に取り扱っていたのが「輸出商」だつた。

各府県や地場産業自身による美術工業育成策が実施されることによって、各地に輸向け工芸品を製作する工房や会社があられ、その結果工芸品の輸出を専門にする企業が設立されるようになる。これは、まさしく石川県の殖産興業の特徴の一面をも表したものである。その代表が「金沢銅器会社」（明治十年二月設立）や「九谷陶器会社」（同十二年設立）、さらに円中孫平の「円中組」であつた。なかでも「直輸出商」とよばれた海外取引業者の先駆的存在であつた円中組は、「年報」でみるように織物・陶器・銅器をはじめとした総合輸出商社（当時は雑貨業と称した）の体をなしていたのである。

本康宏史（もとやす・ひろし）
1957年生まれ。金沢大学大学院にて学位取得、博士（文学）。石川県立歴史博物館学芸課長をへて、現在、金沢星稜大学経済学部教授。専攻は、日本近代史・地域史。



石川県金沢博覧場列女之図（明治7年）
（個人蔵／石川県立歴史博物館提供）



初代諏訪蘇山作《葡萄透し花瓶》19世紀 石川県立工業高校蔵
初代諏訪蘇山は金沢出身の明治・大正時代の陶芸家。
本作は石管型を生かした透かし彫りが見どころ。



阿部碧海製、春名繁春画《色絵金彩海龍図遊環花瓶》19世紀 石川県立美術館蔵
元加賀藩士、阿部碧海は殖産興業として金沢九谷を製陶。
本作は図案指導書「温知図録」に下図が掲載されている。



明治20年代女子生徒作品《刺繍観音の図》1887～1897年 石川県立工業高校蔵
 女子生徒による緻密な刺繍作品。1890年京都から教師を招き
 学校に女子高等授産所を設けた時期に作られた。



松井乗雲《日本武尊像》1880年 石川県立美術館蔵
 金沢出身の仏師。兼六園の「明治紀念之標（日本武尊像）」の
 原型という説があるが定かではない。

「職人」から「工芸家」へ

東京藝術大学大学院 芸術学修士課程 榎本佳

「工芸」概念の形成と近代教育制度の導入

はじめに

兼六園の《明治紀念之標（日本武尊像）》は、西南戦争で命を落とした石川県出身の兵士たちを祀って、1880年（明治13）に建てられたもので、日本における「銅像」の嚆矢と位置づけられている。私がこの像を初めて見たのは、まだ小学生くらいだった。それから時を経て、日本における最初の「銅像」というこの像の歴史の意味を知った後に、再びこの像を見たとき、私は小学生の頃には感じなかった違和感を覚え、奇妙な印象を受けたのである。

この違和感の正体は、知識として知っているはずの「銅像」と目の前に実在する《明治紀念之標》を結びつけることが難しかったことにあり、と思われる。「銅像」という語は、広義には銅製の像を指す語ではある

が、私たちが「銅像」と聞いて思い浮かべるのは、公の場に設置された記念碑的あるいは顕彰的品格の強い肖像彫刻であろう。このいわゆる「銅像」の日本における成立は、西洋からの「モニュメント」概念の受容と技術の導入によるものであったとされる。《明治紀念之標》を見てみると、なるほど、公園という近代に新しく登場した公の場に、兵士たちを顕彰するために建てられたこの巨大な像には、確かにモニュメンタルな要素が認められる。しかし一方で、この像は、地元金沢では「金仏さん」と呼ばれ信仰の対象にもなったように、西洋の「モニュメント」というよりは正面性が強く安定した仏像的な造形感覚が前面に出ている。また、原型については、金沢の仏師松井乗雲の作という説もあるが確証はなく、誰によるものかはつきりしていないが、

铸造は、高岡の鋳物師である藤田治三郎らによるとされており、西洋から輸入された技術ではなく、明治以前から続くいわゆる「職人」の技術が用いられている。

明治以前からの「職人」によって建てられた日本における最初の「銅像」とされる《明治紀念之標》は、この時代の「工芸」や「彫刻」を取り巻く混沌とした状況を象徴しているのではないだろうか。本稿では、このような混沌とした時代であった明治期における制作者たちの意識の変化、つまり、彼らがいかに「職人」から「工芸家」へと変貌していったのかを、「工芸」概念の形成、教育制度の導入という観点から考えてみたい。

「工芸」概念の形成

「工芸」という概念は、実はかなり複雑



兼六園《明治紀念之標（日本武尊像）》。1880年建立

である。美術のジャンルのひとつとしての美術工芸、伝統工芸、あるいは器や家具、着物といった日用品を含む産業工芸など、現在でも「工芸」を明確に定義づけることは非常に困難である。このように多義的な

「工芸」という概念は、どのように形成されたのだろうか。

1980年代から盛んに論じられてきた近代美術制度史研究によって、「美術」という語が西洋概念の官製訳語として明治

の初めに成立し、その概念の明確化および制度化も明治政府の美術行政によって進められたことが明らかにされた。「工芸」という語もまた、もともと日本で使われていたわけではなく、西洋から「美術」概念を受容したことで明治期に相対的に形成された概念であり、ジャンルだったのである。明治期の日本における「工芸」という語は、必ずしも現在と同じように使われていたわけではない。むしろ手工業というニュアンスが強く、産業革命が本格的に始まる以前の日本では「工芸」と「工業」の区別は曖昧だった。また、「美術」との関係においても、両者の境界は未だ不明だった。このような「工芸」概念の不明瞭さの原因は、「美術」の概念形成が途上にあったことや、美術行政が殖産興業政策を軸に進められたことにもあるが、根底には「工芸」が「美術」や「工業」の母体であったことにある。明治以前の日本では、ほぼ全ての造形物およびその制作者は「工」という概念により包括されていた。そこから、「美術」概念の受容と制度化に伴い「絵画」と「彫刻」が分離され、新たに「美術工芸」という美術としての「工芸」が成立した。また、近代

的機械工業の成立に伴い「工業」が分離され、工業（産業）としての「工芸」が成立した。すなわち、「工」から「美術」と「工業」が分離独立した後に残されたものが、それぞれの領域で「工芸」となったのである。こうして明治期に「美術」と「工業」の中間的な領域として形成された「工芸」は、その成立時において既に、美術としての「工芸」と産業としての「工芸」の両義性を含んだ複雑で曖昧な概念であったのである。

徒弟制から学校教育へ

明治以前の「工」を支えていたのは「職人」と呼ばれる制作者たちであった。「職人」とは、その範囲は時代により異なるとはいえ、一応は専門的な技術をもった手工業者と定義できるだろう。そして、彼らが職人たる要であった「技術」を伝習するためのシステムが徒弟制であった。ただし徒弟制には、技術の伝習という教育的側面とともに、雇用契約という経済的側面もあり、職人社会における規範そのものでもあった。しかし、明治に入り、封建的身分制度の廃止に伴い職業の自由化が認められ、また、

近代的工業生産が発展を遂げると、徒弟制はその存在意義を失っていった。徒弟制に代わり技術の伝習という教育的役割を担っていたのが学校教育であり、明治20年代には日本各地で、工業学校、工芸学校、美術学校が設立されていった。

その先駆けとなったのが、1887年（明治20年）に創設された金沢区工業学校である。金沢工業学校規則には「本校ハ各種ノ工芸ニ関スル学理ノ応用法ト芸術トヲ兼授ク」という理念が掲げられており、また、学科は、専門画学部、美術工芸部、普通工



石川県立工業高校 納富介次郎胸像。彫刻家吉田三郎作

を判断し、適不適を決定することがあり、学校教育への徒弟制の影響が指摘できるのではないだろうか。

「職人」から「工芸家」へ

明治期に、「工」を母体としながらも、「美術」と「工業」の中間的な領域として「工芸」が形成されたことで、「工芸」は美術工芸からデザインまで様々な領域を含む概念となり、その担い手も「職人」から「工芸家」や「デザイナー」へと分化していったといえる。そして、「工芸」概念の形成に伴い、「職人」における技術の伝習システムであった徒弟制も学校教育へと再編されていったのである。

しかしながら、現在においても「職人」という存在が消失してしまっただけではなく、また、徒弟制的な技術の伝習システムもその性格を変えながら存続している。「工芸」概念成立の過渡期に「職人」の技術によって建てられた日本における最初の「銅像」である《明治記念之標》は、欧米中心主義的な近代化が批判され、美術という概念そのものが揺らいで久しい現在、「工芸」

芸部の三部で構成されていた。ここには初代校長となった納富介次郎の工業教育思想が色濃く反映され、「工芸／工業」に「美術」を導入するという意図があったと思われる。

納富は、ウィーン・フィラデルフィア万国博覧会に事務官および審査官として参加し、ウィーン万国博の際には、伝習生として西欧の製陶技術を学んだ。また、内国勧業博覧会でも審査員を務め、『温知図録』の編纂にも関わるなど、日本の殖産興業政策に大きく貢献した人物である。納富は、自身の経験から日本産業の近代化には、工業教育が重要であることを認識し、また、明治維新により大きな打撃を受けていた地方産業の改善と振興がその要であるという考えに至った。地方産業、特に伝統産業の改良・振興には、その担い手であった「職人」の意識改革が必要であり、納富が金沢区工業学校の創設に先立ち農商務省の巡回教師として石川県に招聘された際には、技術的指導や意匠・図案の改良だけにとどまらず、産業としての経営的な問題にまでその指導は及んでいる。

金沢区工業学校の入学資格に、30歳以下という中等学校としては比較的高い年齢制

とはなにか、「工芸家」とはなにかを考えるうえでの指標のひとつとなるのではないだろうか。

榎本佳（えのもと・よし）
1981年、金沢市生まれ。2005年、金沢美術工芸大学大学院工芸科修了。現在、東京芸術大学大学院芸術学修士課程在学中。研究分野は近代日本彫刻史、工芸史。

参考文献

- ・遠藤元男『日本職人史序説』雄山閣出版、1985
- ・北澤憲昭『眼の神殿―美術―受容史ノート』美術出版社、1989
- ・北澤憲昭『境界の美術史―美術―形成史ノート』『新装版』ブリュッケ、2000
- ・木田拓也『工芸とナショナルリズムの近代』吉川弘文館、2014
- ・佐藤道信『日本美術』誕生
近代日本のことばと戦略講談社、1996
- ・佐藤道信『明治国家と近代美術―美の政治学―』吉川弘文館、1999
- ・田中修二編『近代日本彫刻集成 第一巻 幕末・明治編』国書刊行会、2012
- ・濱太二『工業教育思想の研究―明治初年の納富介次郎と金沢区工業学校』橋本確文堂、2012
- ・森仁史『日本へ工芸の近代』吉川弘文館、2009
- ・『金沢の近代工芸史研究』
金沢美術工芸大学美術工芸研究所、1995
- ・『県工百年史』石川県立工業高等学校創立百周年記念実行委員会、1987



板谷波山作《石榴模様花瓶》石川県立工業高校蔵



※本画像は令和3年10月22日に著作権法第67条の2第2項に該当する申請を行い、同項の適用を受けて作成された

先染萬病園
紫雪本舗
鳥屏圓
金澤尾張町
石果傳六

近代数奇者と工芸

人：業種
TV：おもな所有物
■：緑の場所

明治から昭和初期にかけて、茶の湯に熱心な実業家達が様々な名器を収集し、金沢の工芸を支える礎を築いた。代表的な7人の茶人を紹介しよう。

亀田 是庵

かめだ ぜあん
1818 (文政元) - 1883 (明治16)



金沢片町にて薬種商宮竹屋を営み、加賀三味薬を調整販売した。祖父鶴山、父桂稔ら趣味人の影響を受け、数寄を好む。詩を銭立斎や林蓀坡に、茶道は裏千家宮崎宗敬・宗良父子に師事した。玄々斎が金沢来訪時、初めに招いたのが是庵。茶室「吟風亭」は名を「是庵」とし、1957年に金沢寺町の料亭「つば甚」に移築された。

- 人 業種商
- TV 長次郎七種の赤樂茶碗「早船」(畠山記念館蔵)
- つば甚茶室

細野 燕台

ほその えんだい
1872 (明治5) - 1961 (昭和36)



金沢の酒造家出身。漢学者五香屋休哉に陽明学を学び、北方心泉に影響を受け書風を確立、同時に煎茶道を極めた。金沢で初めてセメント商をはじめ、伊藤博文や井上世外ら財界人と交流。美術商を営み、金沢美術倶楽部設立に尽力。篆刻家福田大観(魯山人)の才を見出し、料亭「山の尾」の太田多吉、陶芸家須田菁華らを紹介。俵屋宗達を宝円寺境内に発見し、宗達会茶会発足にも尽力した。

- 人 セメント商、美術商
- 廣瀬印房篆刻

三代 山川 庄太郎

やまかわ しょうたろう
1876 (明治9) - 1961 (昭和36)



金沢豎町にて三代に渡って米仲買商と質屋を兼業。初代は国宝・仁清色絵雉香炉(石川県立美術館蔵)を入手。二代は酒造業を展開、松岡三次の助言により阿蘭陀白雁香合をはじめ山川コレクション(同美術館蔵)の茶道具の多くを蒐集。三代は米穀取引所や加州銀行等の重役を務めた。1959年石川県美術館開館にあたり、雉香炉を寄付。

- 人 酒造業
- TV 国宝「色絵雉香炉」(野々村仁清)
- 金沢湯涌江戸村(住宅移築)

林屋 亀次郎

はやしや かめじろう
1886 (明治19) - 1980 (昭和55)



横安江町の茶商林屋新兵衛の六男。京都宇治の林屋茶店に勤務後、1912年宇治村会議員に当選。1930年三越金沢店を開業のち、株式会社丸越を創業、北陸鉄道社長、県商工経済会会頭等を務め、金沢から地方経済界で活躍。1947年第一回参議院選に初当選、吉田首相の片腕となり辣腕を振るう。

- 人 百貨店業、政治家
- 林鐘庵

越沢 宗見

こしざわ そうけん
1887 (明治20) - 1970 (昭和45)



金沢の美術商「二嘉」から呉服商「越中屋」の養子となる。茶の湯の世界に入込み、その人脈は近衛文麿、根津嘉一郎、高橋箒庵、野村得庵、村山龍平まで広がる。茶道は裏千家野島乃庵に学び、十三世円能斎、十四世淡々斎とも交流。ノンコウ加賀七種の黒樂茶碗「香久山」、備前福耳花入、乾山竜田川反鉢(出光美術館蔵)も所蔵する目利き。弟子は取らず、金沢の茶道界きっての数寄者であり続けた。

- 人 呉服商
- TV 黒樂茶碗「香久山」
- 越沢宗見邸(東山)

佐藤 助九郎

さとう すけくろう
1896 (明治29) - 1979 (昭和54)



礪波市生まれ。土木建築業佐藤工業株式会社を継ぐ。貴族院議員を務める傍ら、船舶、鉄道、新聞社、放送局等の事業に関与し、地方財界の重鎮として活躍。富山県内の大学、高校内に道具一式を揃えた茶室を寄贈し、流派を越えた北日本茶会を発足させる等茶の湯の普及に尽力。会社創業百年記念事業の一環として、1961年佐藤記念美術館を設立。

- 人 土木業、政治家
- TV 藤原定信筆「石山切」
- 佐藤記念美術館

中村 栄俊

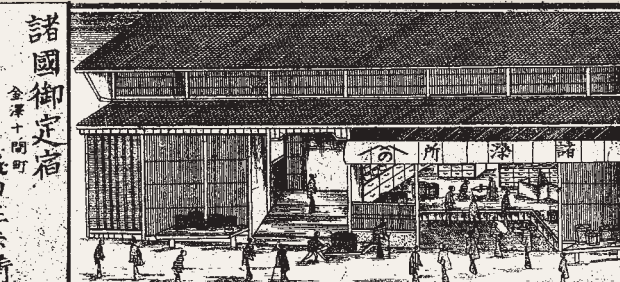
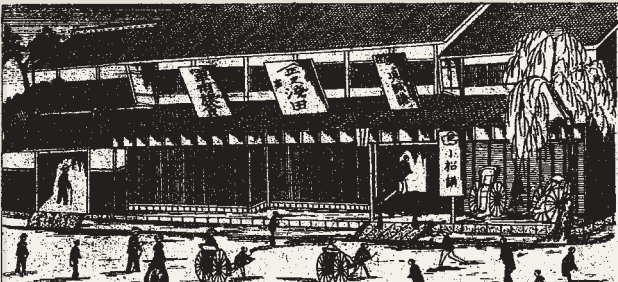
なかむら えいしゅん
1908 (明治40) - 1978 (昭和53)



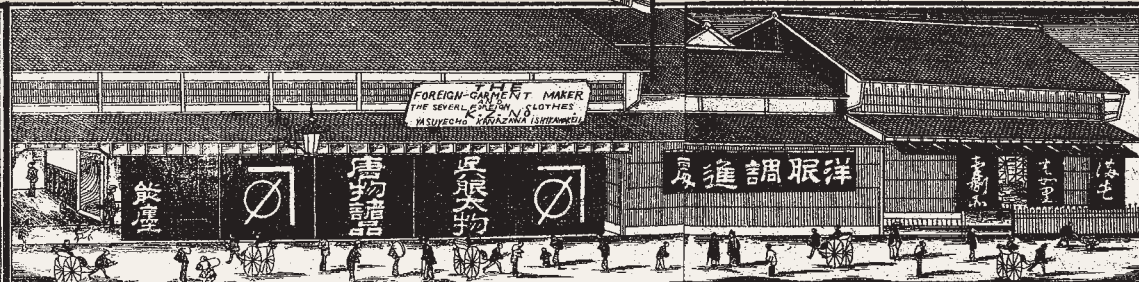
中村家三代目として酒造業の傍ら、金沢商工会議所設立に尽力。市会議員当選時に議長であった前川吉栄の影響から、美術品蒐集を始める。戦後激動期に名家秘蔵の品が市場流出する中「美術品は一個人のものではない、国民の宝であり、一般に公開せねば」と蒐集を進め、1965年財団法人中村記念館を設立。

- 人 酒造業
- TV 手鑑(後鳥羽天皇宸記以下二百一葉)1帖
- 中村記念美術館

参考：金沢美術青年会創立50周年記念誌「石川・富山の近代茶道―八礼会と数奇者―」



諸漆并三合
繪ノ具合
岡能作



和洋呉服商
洋服調進所
諸官制被服御用達
能久治
金澤安江町



卯辰山焼（乾山写宝つくし文舟形器）
19世紀
金沢卯辰山工芸工房蔵
幕末から明治初期、卯辰山山麓の土を使い作られた。京都の陶工尾形乾山の作風を写した作品。



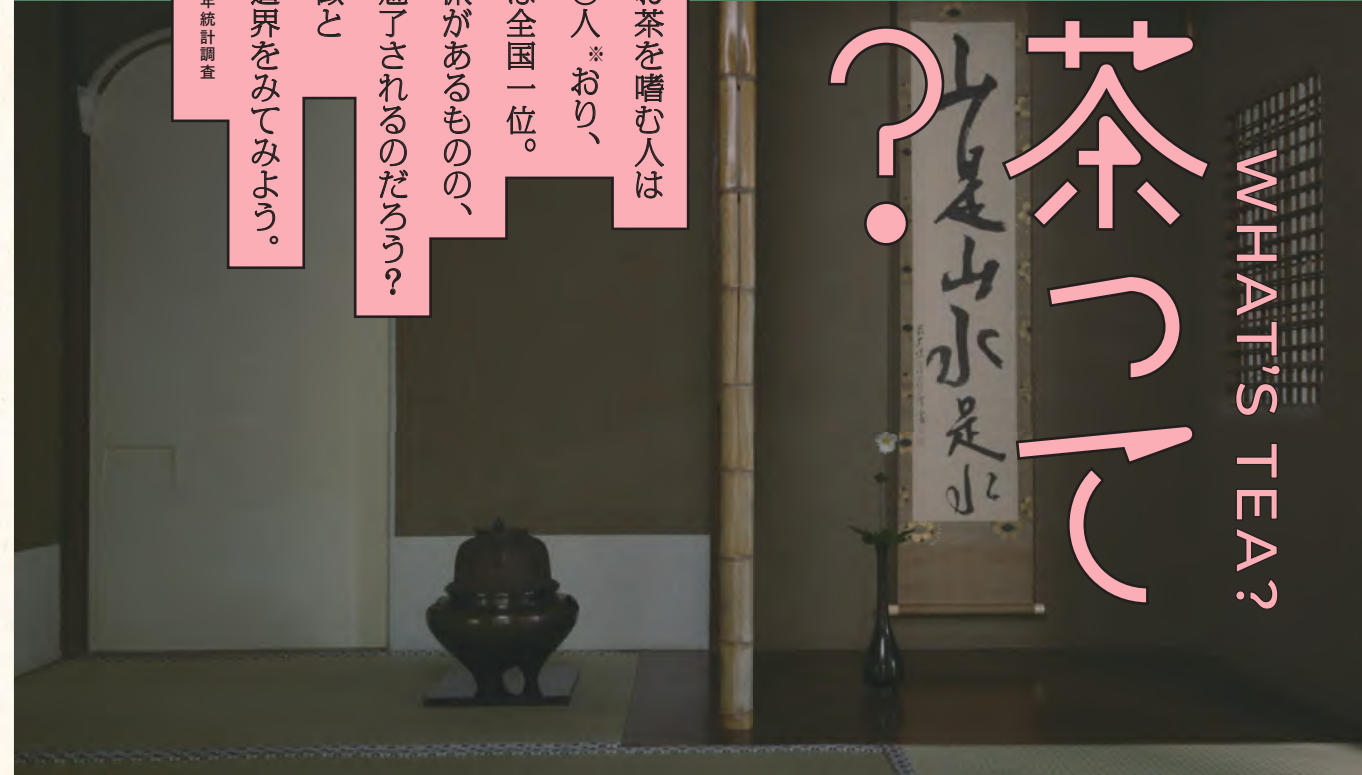
鶯谷庄米（刷毛目平茶碗）
19～20世紀
金沢卯辰山工芸工房蔵
幕末～明治の陶工。鶯谷久田窯の横萩一光に製陶を学ぶ。南蛮・信楽・青磁・染付など幅広く写しを行う。

何お茶って？

WHAT'S TEA?

石川県でお茶を嗜む人は
二七〇〇〇人※おり、
人口比では全国一位。
様々な流派があるものの、
皆どこに魅了されるのだろうか？
お茶の特徴と
金沢の茶道界をみてみよう。

※総務省2016年統計調査



点前

ふるまい

POINT 3

抹茶を点てる手順と所作を様式美に高めたもの。ただ湯をわかし飲むばかりであるが、家元・流派によって美意識が違い、それが所作に表れている。現在100に及ぶ流派があり、道具や季節等に応じさまざまな変化が生まれるほか、時代とともに新たに編み出される点前もある。

道具

よそおい

POINT 2

元々は日常的なものが、茶人の見立てで「茶道具」とされた。掛軸を主とし、茶席のテーマや季節に応じて取り合わされる。流派による好みがあり、道具の来歴等によっては美術品として特別な価値を持ち、権力や名誉の象徴にもなる。

茶室

しつらい

POINT 1

茶の湯のために用意された、四畳半を基準としたほぼ密室の極小空間。非日常の精神世界に入り込むため、季節の風情が満ちた庭や露地を通り、開口をくぐる。自然素材、古材が喜ばれ、名席と評される茶室を模して建てられることも多い。

抹茶というおいしい発明



もともとは薬。中国から伝来し滋養強壮や健康のための薬だったが、14世紀には庶民にも普及し嗜好飲料として発展した。

品種改良

茶の木の良い品種が掛け合わされ、かつ直射日光をあてず熟成させる日本独特の栽培法によりうまみや甘味が増幅している。



茶銘

茶葉は各茶舗でブレンドされ、茶人や高僧等が命名した銘がつけられている。末尾に「昔」や「白」がつくことが多い。



石川県内の主な茶道流派と門人

裏千家	淡文会	石川支部 石川南支部	2300 500
表千家	同門会	県支部	784
宗和流	宗和会 中島宗和会		145
宗徧流	金沢支部 加賀支部		110
遍州流	金沢支部 金沢兼六支部 山支部 能登支部		80
大日本茶道学会	金沢支部		30
皇風煎茶礼式	石川弘風会		100
煎茶道松月流	北陸支部		90

参考「千利休居士四百年遠忌 うめかおる その二」出版：社団法人茶道裏千家淡文会石川支部 1990/9、「北國文華 第80号(2019夏)特集：茶都 金沢の底力」出版：北國新聞社出版局 2019/6/1(石川県の主な茶道流派と門人及び金沢の会員制茶会の出典)

金沢の茶道

藩主や家老等のたしなみとして、金沢は藩政期から茶道の盛んな土地だった。明治末期、有力実業家・数寄者により多くの茶道具の名品が集まったことも茶道が盛んであった理由の1つだ。戦後から昭和40年代頃までは実業家による茶道具収集が続いたが、経済成長により担い手に変化。日本らしい修練として茶道に参加する女性が増加し、許状発行など「家元」の制度が確立。それぞれの流派は全国組織化し、日本文化の象徴としてその権威とネットワークを築き上げている。

金沢の茶道の流れ

1980年代～

家元制度の確立、
茶道人口の増加

1950年代～

学校教育への導入、
女性の担い手増加

1920年代～

税制改革等により
茶道具が移動

1870年代～

近代数寄者により
道具集積

江戸年代

藩主、武家による
茶道奨励

金沢の会員制茶会

竹溪会

数寄者達8人の会員制の会。現在は大島宗翠氏、谷村庄市氏ほか岡能久氏、那谷寺木崎馨山住職らが参加。

楽友会

数寄者12名が集う100年以上の歴史ある会。月1度会員が席主を務め、作家、職人、美術商が流派を超えて所属。

隆茗会

月心寺の月釜で知られる会員制の会。千仙叟の月命日である毎月23日に釜が掛かり、90年を超える歴史を持つ。

遊心会・ 一心塾

裏千家淡文会石川青年部を卒業したOBが集う会。中心的人物は、遊心会は岡能久氏、一心塾は大樋陶治斎氏。

清香軒



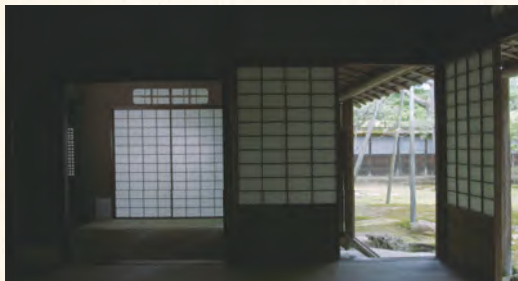
床から庭への広がり

異閣造営時のままの姿を伝える茶室「清香軒」と、清香書院から望む「飛鶴庭」。3畳台目の小さな空間に、深い軒下と幅広い土縁がL字に広がる。床面とフラットな床の間から細部まで工夫され、庭までの連続性がある。ゆったりと時を感じられる空間に、斉泰の美意識と母への気遣いを窺い知ることができる。

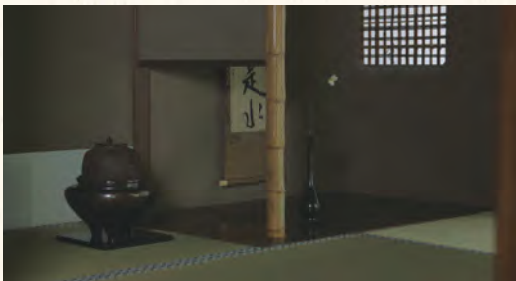
表千家六代・原斐宗左の好みである踏込床（原斐床）であり、楊枝柱等、床の間と茶室内、土縁そして庭までが一体化して感じられるように細部まで配慮されている。



出典 千利休居士四百年追憶うめかるその二 P20 加賀の茶人と茶室／牧孝治 出版 社団法人茶道要千家淡文会石川支部 1990/9



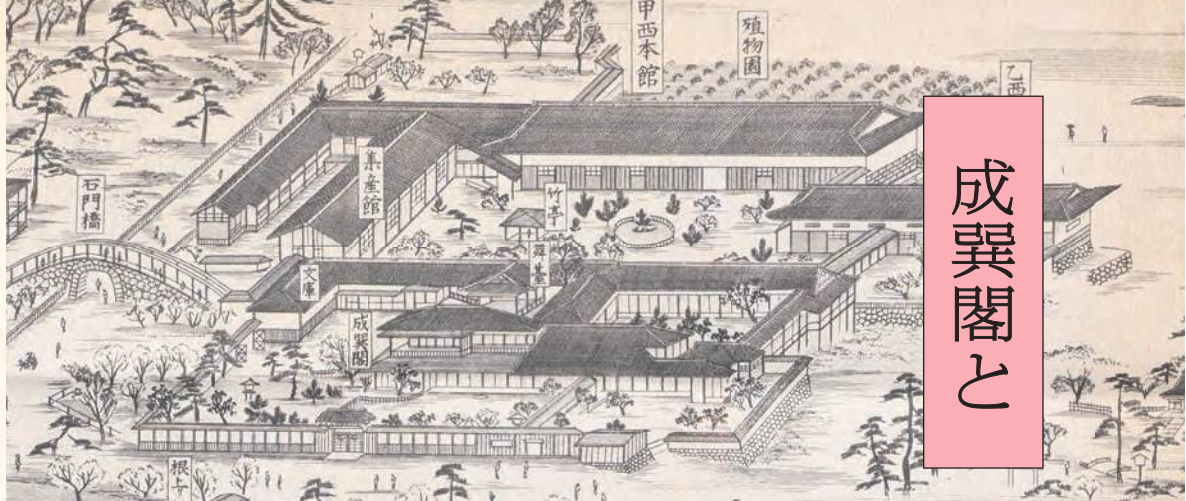
清香書院から茶室と飛鶴庭を眺める



床の畳と床の間が段差なくフラットに設計される

お茶って何？ WHAT'S TEA?

成異閣と



成異閣は1863年、13代藩主斉泰が母真龍院のために、竹沢御殿の一部を移し異御殿として建てたもの。建立当初は1,500坪（今は約500坪）で、1階は武家書院様式、2階は数奇屋風書院造り、一つの棟に二つの建築様式が組み込まれていて幕末の大名建築としては貴重な建物だ。

成異閣の歴史

完成

藩から官へ
博覧会・博物館

1863年、13代藩主斉泰が母のために建立。工芸職人の高い技術と母への心配りを随所に感じられる、安らぎの建築が完成する。

明治維新後、国の管理を経て1870年から1908年まで県の所有となる。博覧会、博物館、学校等として利用される。1874年には豪商木谷藤十郎らによる金沢博覧会の会場に。

再び
前田家へ

成異閣茶会

国宝指定

重文指定

公益財団法人へ

1909年大正天皇の北陸訪問の際、県は成異閣を前田家に返還し、宿泊所とされる。玄関や表門等大改装が行われる。

1932年開催の「産業と観光の博覧会」を記念し、33日間に渡り大茶会が開催。市内の主な近代数寄者が席主となる。

1983年に旧国宝指定。成異閣の管理は公爵前田育徳財団、のち前田育徳会と委託。前田家の実家であり疎開先となった。

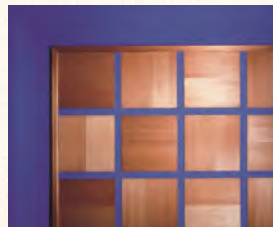
1949年管理が財団法人前田育徳会へ。1950年文化財保護法による重要文化財に指定。

戦後独立採算制を取り、茶会や式場に貸出された。成異閣保存会、財団法人成異閣を経て2012年に（公財）成異閣の管理となる。

加賀藩の工芸の技



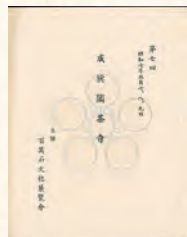
「謁見の間」の欄間は、御細工所の名工、武田友月の作と伝わる。寿帯鳥に椿、梅、朱色、紫色、鉄砂など多様な色壁が取り合の意匠の透かし彫りに極彩色が宿る。



ウルトラマリンブルーの壁。他にも白群青、朱色、紫色、鉄砂など多様な色壁が取り合の意匠の透かし彫りに極彩色が宿る。

成異閣茶会

1932年4月11日より33日間、成異閣で大茶会が開催された。満州事変の約半年後、金沢初の観光を意識した「産業と観光の大博覧会」開催の記念として行われたもので、委員長の前木外吉をはじめ越沢宗見らが開催に尽力した。	第1回 本多男爵
	第2回 中島徳太郎
	第3回 石黒伝六
	第4回 杉野甲午郎
	第5回 八日市屋清太郎
	第6回 山川庄太郎
	第7回 岡伊作
	第8回 素谷篤爾
	第9回 村彦兵衛
	第10回 岡本吉次郎
	第11回 美術商幹事役 合同席主



第7回岡伊作 会記表紙

参考 金沢美術青年会創立50周年記念誌「石川・富山の近代茶道—入札会と数寄者—」

2 現場の人はどう働いているのか？

工芸の支え手は、ものづくりを行う作家だけではない。

職人やメーカー、施工業社、機構など、

どのような人がどのような思いで活動しているのだろうか？

現場の話を聞いてみよう。

秋明菊／シユウメイギク



陶芸・ガラス作家を支える

沢田 滋（共栄セラミック）

—— 共栄セラミックさんについて教えてください。

元々は主に瓦の釉薬を作って販売している会社でした。父の事業を受け継ぎ、現在は個人向けの電気窯のオーダーメイドや修理が中心になっています。

瓦の釉薬は、ボールミルという機械の中に原料などを入れて20時間、一晚以上回します。そこで粉碎と混合をしてフィルタープレスという機械で絞って残った粉体が釉薬になるんです。それを籠の中にいれて天日干しにし、乾いたらパッキングして送っています。

10年以上前は約200トンくらいで、釉薬だけで全然やっていました。昔は年々瓦用の釉薬の販売は減っていて、昔は10件以上あったのですが、県内で残っている

瓦メーカーは1つだけ。

瓦屋さんに釉薬だけでなく窯の炉材も販売していたのですが、ほとんど瓦屋さん自体はなくなっていく中で、同じ炉材を扱うのは何かと考えると、九谷焼の窯などを修理しているという自分の代からやり始めたんです。

—— もともと瓦向け釉薬を作っていたのに、陶芸用釉薬を製造・販売するのではなく電気窯を作るようになったのはなぜですか？

瓦と違ってやきものの釉薬となると難しく、削って乾燥して、最後に釉薬をかけて焼くけど、その釉薬がだめだったら全部だめになってしまう。九谷焼の産地では昔からそういうトラブルが結構あったので、やきものの釉薬はやらない方がいいと笑。

九谷焼は窯元さんも窯もたくさんあって、それぞれに焼き方が違います。窯の特性や焼き方を踏まえて釉薬を調合していたお店があったのですが、うちはそこまでは難しい、というか出来ないですね。

—— 沢田さんの代から電気窯を作ったり修理されるようになったことですが、その技術自体はどこで学ばれたのですか？

ほとんど独学ですね。卯辰山工芸工房に専門員として戸出雅彦さんがいた平成6年頃から出入りさせてもらって、窯の修理や炉材の販売をしながらその構造を研究しました。作家さんの「窯をこう使いたい」という思いや要望に合わせた窯を提案ができるのがうちのいいところですね。

注文の割合は、今は半分以上がガラスの



電気窯です。ガラス工芸専門の窯メーカーは数社しかないんですよ。うちがよく卯辰山工芸工房や富山のガラス工房に行っていて、そこからクチコミで広がり注文をいただきます。陶芸の窯は関東、関西、岐阜、愛知にも専門で作っているところがあり競争が激しくて。やきものが強い産地であればあるほど、零細な規模では



電気窯制作中の様子

ありますが、窯を修理したり作ったりするところがあります。

—— 個人作家にはどんな電気窯が人気なのでしょう？

当たり前のことなのですが、よくあるオーダーは燃費が良くて使いやすいものです。

つい最近、ガラス作家の有永浩太さんが考案されたベースモデルがあります。デザインは有永さん、設計はこちらでしてるんですが、その溶解炉が欲しいという方がすごく増えている、今年に入って有永さんタイプも含めて10基は納めています。

ガラスの窯は、火をとめると一回開いて壺を交換しないといけないんですが、有永タイプのはそれが簡単にできるし火の消し方によっては壺を交換しなくてもある程度使えて耐久性があるんです。

これを有永さんが雑誌で「魔法の溶解炉」と紹介されていて：何故これが人気なのかわからずに作っている部分があったんですが、「それでか」とようやく理解できました。



瓦の釉薬

—— いままであった中で思いがけないオーダーがあれば教えてください。

作家さんもこだわって制作しています。色々情報を仕入れながら、作家さんの「こうしたい」「ああしたい」が実現するように窯を作っていくのは楽しい反面しんどいです。

以前東京藝術大学にロストワックス用の電気炉を入れたことがあったのですが、先

生に「窯のデイトールが華奢だよね」と言われたことがありました。彼らはそういったところもすごく興味を持って見てる。こちらとしたら耐火度にしっかり合っていて、挙動的にも「使えればそれでいいじゃないか」ということも、作家さんからすると「見た目も大事」「用と美を兼ね備えていなければダメだ」と。

—— 事業をはじめた当初と現在でなにか違いを感じますか？

個人作家さんは増えていると思います。教育機関が増えて、卒業後修行して、自分の工房を持ちたいという人が増えていますね。現に瓦の釉薬が売上の割合の100%だった頃と比べると、窯の注文の量はすごく増えています。

石川県だけでなく、こちらの教育機関を卒業して全国に行った人から注文をいただくのでエリアが広がり、北海道や九州、大分、鹿児島などに納めました。去年はパラオ共和国から注文もあって。それは兵庫県三田市とパラオが姉妹都市らしく、三田市



沢田さん、工場入り口にて

の付き合いのあったガラス工房の方から紹介でオーダー頂きました。

石川県が藩政の頃から力を入れている工芸、なかでも九谷焼は、経済ベースで見ると超ニッチなところなんだけど、こうやって関わらせてもらっているのはラッキーだったなと思います。

—— 今後、沢田さんが作ってみたい窯はありますか？

今作ってみたいのはピザ窯ですね笑。まだ作ったことがなくて、うつわを作る窯と温度が全然違いますが、高い温度を基準に

すれば低いものも対応できると思います。

それはそれとして：以前「移動できる窯はないの」と聞かれたことがありました。トラックに積んで、他の場所でワークショップをするという発想らしくて。お金があれば、10トトラックを1台買って、荷台に発電機や溶解炉を積んだら実現可能かと。ノマドワーカーとあって、いろんな場所で景色をみながら仕事をしますよね。作家さんはこもってやる人が多いけど、例えば海や山の緑を見ながら仕事をしたら、環境によって作るものも変えられると思います。山の綺麗なところや海の見晴らしの良いところに、工房になり得るような移動式のトラック。1週間とかグランピングみたいにしても良いかもしれない。ブレイクスルーするような感じで、面白いと思ったんですが、あるガラス作家さんに「この案どう？」と聞いたら「俺はいい」と遠慮されました笑。

沢田滋（さわだ・しげる）

平成2年名古屋商科大学卒業。松村物産（株）に5年間勤めた後、共栄セラミック（株）に入社。平成15年から現職に就く。趣味は釣り、三線、スポーツ観賞。

作家を支援する 新木伊知子（金沢クラフトビジネス創造機構）

—— 新木さんは金沢市の工芸に長年関わっていらっしゃいますが、もともと工芸志望だったんですか？

いえ、元々は金融機関にいました。大手の金融系の一つに就職したんです。銀行業務とはあまり関係ないことに従事していき、その時の仕事に楽しさを見出せず、公務員試験を受けました。受験者は全体で100名以上いたけど、その中の女性採用は当時2名。幸運にもその一人になりました。金沢市役所に入って、観光政策課、生涯学習課にいたこともありますが、2004年から「工業振興課」の中に新設された「ファッション産業振興室」に配属になりました。その後「クラフト政策推進課」補佐から課長、そして所管する営業戦略部長になりました。…たまたまそうい

う道を歩んだというか。ほとんどは長くて5、6年で全然違う部署への異動がある。でもなぜかずっといたんです、工芸のところに。こうして、私は心から工芸が好きになってしまったんです。

—— 00年代以降は工芸管轄の課は随分動きが活発ですね。流れを教えてくださいますか？

経済産業省（当時は通商産業省）が生活と密着したあらゆる文化を「ファッション」と言った時期があって、それを受け金沢市が2004年に「ファッション産業都市宣言」をしたんです。その宣言後にできたのがファッション産業振興室、2005年には任意団体の金沢ファッション産業創造機構が創設されました。振興室にいた当時、金沢市工芸協会等の事務局も兼ねてい

たんですが、工芸もファッション？みたいな抵抗や悩みはありました。でも結局、2009年に市がユネスコ創造都市ネットワークにクラフトの分野で登録されたことを受け、ファッションから「クラフト」へ政策転換し工芸中心の課になりました。

振興室では「おしゃれメッセ」というイベントをしていて、地元の生地を使ってファッションショーをしたり、ユーミンが加賀友禅の着物をプロデュースしたり。市民が持っている加賀友禅を募って一同に展示したのもこの時なんですけど、とっても心に残っていて大変だったけどやってよかったと思います。

2010年には「生活工芸」という言葉を使い、ガラス作家の辻和美さんプロ





おしゃれメッセ(2006)にて市民が持っている加賀友禅を公募・展示

よね。文化と経済は両輪です。

同年オープンした dining gallery 銀座の金沢も、色々関わる中で出てきた発想です。2015年に北陸新幹線が開通し、2時間半で金沢に来られるようになる。常に作家を紹介できる拠点が東京にあれば、そこで金沢をちょっとずつ知ってもらって、「金沢に行きたい」となれば良いなと。

—— 歴史ありですね。ここ20年?で「工芸」や「作家」の変化を感じていますか?

デュースで展覧会や広坂の実験ショップもやりましたね。

そして2011年に金沢クラフトビジネス創造機構に改編、2014年に社団法人化しました。一番大きな変化は、売上をあげられること。工芸って普通にものだけ作っていいばいいというものではないです

最初に工芸の仕事を始めた時は、伝統工芸が中心でした。でも金沢美術工芸大学や金沢卯辰山工芸工房など研修所施設が出来て、今では工芸といっても色々な作品がありますよね。同じ手法でも伝統工芸かと言われるとそうでもなく、アート志向もあれば、生活に根差すものを作る人もいて。

伝統工芸もそうですけど、ものづくりだけで食べていける人は一握りで、兼業をしている人も多い。中には能力あるパートナーが販売関係をして自分は制作に勤しむ人もいる。卯辰山工芸工房の川本館長も金

沢クラフトビジネス創造機構の理事長である福光さんも、養成機関を経てどうやって独り立ちするのが一番大事と言っています。銀座の金沢で修了生等を集めての企画展は機構が請け負っていますが、それぞれにファンがついてきていますね。大きなオブジェを出してもなかなか売れませんが、売れないから外すというのは違うと思っています。作家から出展料はとらないし、委託販売も常識の範囲内でやっています。

—— どのような作品を購入することが多いですか?

どちらかというと思えるものかな。食器は大量生産ものを全部捨てました。全て手作りの器を使っています。それとアクセサリーが好き。

たいした料理を作らなくても、お気に入りの器にちょこっと載せるだけで数倍美味しく見えるし、工芸を暮らしに取り入れるとやっぱり生活が豊かになる。気に入ったのを買うのでもいい、自分だけの贅沢でいいんです。

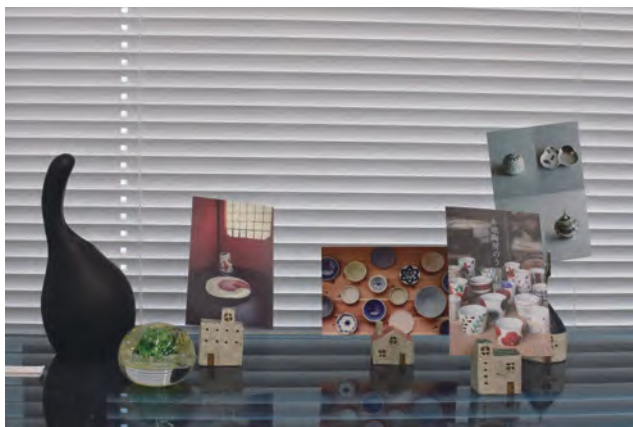
—— 今後どういう支援をしていくべき、という考えはありますか?

金沢市は文化支援の面では有名で、大学研究者や他市町村の人が政策についてよく聞きに來ます。金沢って工芸家には優しいので、移住してくる子もいるし。けれども支援を本当に求めている人のところに行き渡っているかという難しい面もあるかな。

例えば工房開設事業の補助金があるんだけど、里山地域と金沢市中心部市街地だけで全市エリアが対象じゃない。当初が中心市街地活性化基本計画に基づく事業だったからなんだけど、何回もエリア拡大をお願いしたけど無理でした。

街なかでも、元々やってたのを継承するならいいけど、新しく作るのは許可できない場合もある。用途地域によって消防法上の規制が厳しいとか。金沢に工房を持ちたいと思った時点で場所も含めて相談されたほうがいいですね。

—— 計画をしっかり立ててからじゃないと、と相談を迷う作家もいます。



新木さんデスク周辺。作家の作品やDMが並ぶ

ハードル高いかな? 具体的じゃなくても気軽に來て欲しいです。そうやって遠慮して補助を逃すのは残念な話だから、上手いこと利用して欲しいかな。

残念ながら工房開設事業は機構管轄ではないけれど、市の職員も在籍しているので、相談があればこちらも勉強して臨みますよ。私たちは制度の利用を勧めたり、発信

の場を提供したりすることはできる。法律によってできることが限られることもあるけど、それでも最初から「できません」なんて今まで言ってきたことはないです。行政は10人いたら10人一緒にやるというスタンスなので「平準化してやりましょう」という考え方です。でもそれだと物事は進まないし、とにかく人気のある人、積極的だけど芽がまだ出てない人、受け身でなかなか売れない人。結構差はあります。同じようなものを作っても売れる売れないってどうしても出てくる。

金沢クラフトビジネス創造機構では意欲のある人、積極的に関わってくる人のを待っています。私は「こんなことやりたい」と前向きにアピールしに來て欲しいと思います。

新木伊知子(しんき・いちこ)

金沢生まれ、金沢育ち。長年に渡り金沢市役所で工芸関係の事業に携わる。2016年3月経済局営業戦略部長を最後に金沢市役所を退職。2016年4月一般社団法人金沢クラフトビジネス創造機構理事兼事務局長。

現場を支える

中野正啓（ナカダ株式会社）× 坪田健二（坪田電機株式会社）

— それぞれの、普段のお仕事の内容を教えてください。

中野 私たちは、展示会・見本市・展覧会・イベントイベントなど、幅広い分野における会場設営やディスプレイといった「空間創造サービス」を提供しています。近年では、運営業務や事務局業務などのソフト面での業務にも対応しています。

金沢は加賀友禅などの繊維業が盛んなので、昭和40年頃の創立当初は呉服の展示会が多く、その後は石川県というと国体やインターハイ、建築会社のもとで地鎮祭、竣工式などをさせてもらっていたと聞きます。私が入社したのは1997年で、それ

までは私は全然違う仕事をしていたのですが、今の相談役が専務の時に拾われました。

当社の組織は、営業部、総務部、デザイン室の三つの部署と東京支社からなり、営業部に木工製作やサイン製作を行う製作部門が含まれています。部署の括りはありますが、「全員がセールスマン」という感じで取り組んでいます。

私たちの業務は、限られた時間で準備したり、現場で急な対応が発生したりする中で、事業自体の内容や流れを的確に把握しておかないときちんとしたサービスが提供できません。打ち合わせから始まり、最後に現場で施工管理をするという流れが多いです。



坪田健二（つばた・けんじ）
1975年金沢生まれ。1995年
坪田電機株式会社入社。当時手書きだった図面を
デジタル化する。2008年、同社取締役へ就任。
2020年には主力商品をすべてLEDへ変更。

坪田 僕たちは美術館に関わる電気設備、照明の取り付けや調整を請け負って、会期後の撤収作業まで行います。それ以前に打ち合わせをして電気配線図などを書いて準備します。祖父の代には一般電気工事と言われる住宅や工場の配線をしてたんですが、その後お客さんから頼まれて展示会で全国を回るようになりました。

自分が美術館の仕事を行うようになったのは2005年くらいで、ナカダさんから「海外の作家さんが持ってきた蛍光灯がつかない」と連絡があったことがきっかけです。現場に行ったら周波数や電圧が違っていて、結局日本のものをつけました。仕事の現場としては金沢21世紀美術館が多いですが、県立美術館や福井の恐竜博物館でも仕事をしています。

ナカダさんとは、創業者である私の祖父とナカダさんの創業者の仲が良くて付き合いが始まりました。

— 美術照明の技術や作家さんの思いの汲み取り方は、どう学んでいるのですか？

中野 技術研修のようなものではありません。できる限り、作家さんやキュレーターの思いを勉強して、少しでもその思いに近づけるような空間にできればと思って取り組んでいます。もちろん展覧会ではキュレーターの方のご指示があるのでそれに忠実にということになります。「どういう意味か」というのを知りながら、考えながらやるというのが大事ですね。ストーリーがあり

でしょうから。

坪田 僕自身も本当は習いたかったのですが、暇がなかったのが実際です。それもナカダさんに「ああして」「こうして」と言われて勉強していききました。「来た人が見やすい環境にしよう」というのを第一に、後ろから影にならないように、跳ね返りで眩しくないようにと考えています。色についても、「白がほしい」と言う作家さんにも、赤を含め3パターンくらい持つていき、「これはどうですか」と提案します。作家さんは対応が難しいので、社員の中では自分にしかできないかなと思います。美術展はこだわる人が多く、空間の強弱や様々な色の空間を望まれるので：美術展、特にインスタレーションは難しいですよ。

— 美術展と工芸展だと取り組む意識は違いますか？

中野 美術展と工芸展の違いで言うと、意外と工芸は堅牢で、現代ア



中野正啓（なかの・まさひろ）
1969年金沢生まれ。
1996年ナカダ株式会社入社。
2020年同社
代表取締役へ就任。

トの方が繊細です。設営業務をするにも、慎重になるのは現代アートですね。もちろん工芸展も気を使いますが、展示会やイベントは、比較的単純な光の作り方で多くを対応できるのですが、美術展は、照明が重要な要素の1つです。最後は空間や作品の力もありますが、照明で決まることもある、というのを感じますね。

坪田 中野さんにそう言ってもらえると頑張ろうと思えます（笑）。海外作家の美術

工芸家の職人しごと～工芸を支える加賀指物

ボックスやトレイの他にも、工芸の工房の道具や工具に、木は使われています。木の棚、木の作業台、木の枠、木の蓋、木の桶、木の作業板、木の匙やへら等です。例えば、漆を乾かすための室は、内側を水で湿らせるため、樹脂になり代わることなく現在も木でつくられます。さらに工芸では、特定の工程をするために補助具となる型や治具と呼ばれるものが必要となることがあります。加工のガイドとして、材を挟んだり、角度をつけたり、型に合わせて、工程一つ一つ、各々に対応します。型や治具の細部は、作家自身が工夫してつくり上げ、大事にしているものなので、時には表には出てきません。木は、作家自身で削ったり、



銀杏材の糸箱と作業箱



左／金箔の挟み替え時の木箱

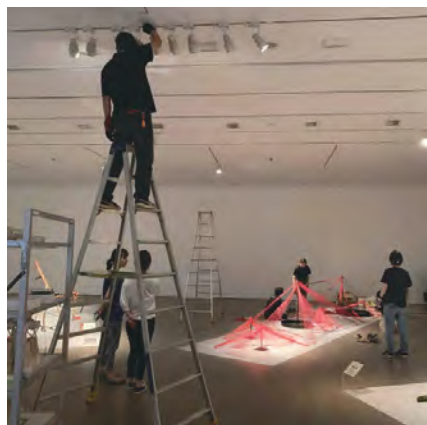
右／漆碗を保管する木箱

加賀指物木工師 青木小波（あおき・こなみ）
金沢市生まれ。金沢美術工芸大学工業デザイン専攻卒業。
建具・加賀指物修行を経て現職。2015年に（株）A.SPACEを開業。

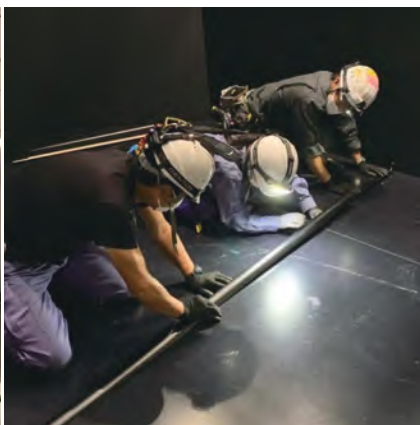
かつて、あらゆるものづくりに、木は必須でした。
今では身の回りに様々なプラスチック・樹脂製の工業製品があります。家庭やオフィスだけでなく、工芸の工房でも見かけるようになりました。制作中に一時的に使うトレイ、道具入れ、材料入れ、運搬用のボックスといったものです。これらは昔は木製でした。

足したりできます。複雑な形にも対応できます。治具パーツの位置替えの釘打ちや釘抜きも容易です。木は樹脂には取って代われない材なのです。
ところで木工は、扱うサイズや加工方法により職人（職工）が分かります。工芸なので、土木・建築を除きますが、大

きな棚は大工、小さな棚物は建具屋、箆、筒は箆屋、桶は桶屋、椀状の入れ物は挽物屋、自由なかたちをノミで彫るのは彫刻師、箱・抽斗・型・治具等の細かいものは指物屋の仕事です。
このように今でも、木工の職人・大工・建具職人・指物師・挽物師・削物師・彫刻師が木を加工し、工芸を支えています。



展示設営の様子



館展示の時、「ピンスポットが要る」と言われたのですが、当時のものは、ランプの熱を冷やすためのファンがついてたんです。それが「ブオー」とうるさいので、そ

の時に新しい器具を買いました。照明テストから電気設備の施工、照明まで全部自分でやり、その時は美術館に時間の制限がなく、夜中までずっと作業をしました。作家さんにも「よかった」と喜ばれ、それが一番やりがいがあった仕事です。
最近では電気設備はしますが照明は照明屋さんに任せています。「自分でやりたかったな」と思うんですが、仕事を収めるためには仕方ないですね。呼んだ方がクオリティが高くなりますから。

—— お二人は金沢21世紀工芸祭に趣都金澤メンバーとして参加されていますが、いつ趣都金澤に入られたんですか？

中野 2010年ごろ、当時の金沢21世紀美術館館長の秋元さんとのご縁で、かなざわ燈涼会の展示設営のお仕事をさせていただいた時に、NPO法人趣都金澤の活動に興味を持ち加入させていただきました。

坪田 僕は青年会議所（JC）を卒業してからなので、2015か2016年。JCで燈涼会を経験して入りました。JCがな

かったら入ってたかどうか：あくまで下請け業者と見られることが多かったので、こんなギャラリーさんと直接接するなんて考えてもみなかった。作家さんに名前を覚えてもらうなんて。

—— 坪田さんは、ご自身で作品を見られたり買ったりしていますしね。

坪田 僕が買うのはガラスが多いですね。工芸アートフェアで連続で1年に1個は買ってます。照明の仕事に携わるのであれば価値を知らないといけないと思って買ったんです。最初はJCだから買わなきゃいけないと思ったのが始まりなんです、今は好きで買います。

中野 私は、鑑賞用よりも日常で使うものが多いです。九谷茶碗まつりで購入したもののやいだき物もありますね。主に器系、花瓶、置物：そういうものが日常生活の中にあると豊かな感じになります。器は自分が気に入った器だと、なんでもないような料理でも盛りつければ美味しく見えますね（笑）。

3 平成以降の工芸

改めて、平成以降の工芸は

どのような動きを見せてきたのだろうか？

近年の政治と教育機関の動きや、

現在金沢市を拠点とする陶芸家向け環境アンケート結果から、

その変化を見つめ直してみよう。



水仙／スイセン

平成以降の金沢の工芸と政治の近現代史

工芸史家 山崎達文

工芸は、平成以降とりわけ21世紀に入って新たな様相を見せ始めた。急速な社会構造の変化は生活と密接する工芸に変容をもたらし、折しも、美術史研究による工芸再検証の高まりは、既成の素朴な価値観に浸っていた工芸解釈に大きな懐疑を投げかけた。金沢は工芸への想い入れが夙に強く、市民の関心も高い土地であり、与えられた課題は時宜を得た検討テーマに違いない。しかし、扱われることの少ない難題で、少しは価値ある言い分の提示には、観点を絞ってのアプローチが必要だろう。そこで、金沢の来し方を概観して、近代工芸の生成以来今日に至る事情のなかで、特徴的と思われる性向を二つ抽出してみた。拙稿の主旨でもあるそれら概要を先に記せば、おおむね次のようである。

まず、金沢は明治以降、政府の支援指導を積極的に取り込み、前時代のものづくりの力量を継承させて、工芸の近代化を図ってきた経緯に特性が認められること。次に、高度で華やかな当地の工芸は、産業の域を超える強い文化的訴求力を有し、今日では行政の商工政策対象と言うより、その好感イメージが都市政策の重要な資源として積極的に利用されていること。金沢の工芸は、各経緯のなかに、この街ならではの性格を見ることができるよう思われ、以下に検討してみる。

工芸とは、自然素材を加工する手工業的技能によるものづくりを指す。ただ、そこには地域産業として在来してきたものと、表現価値を第一義として芸術性を重んじる

ものとは一緒に括られている。工芸（が指し示す中身）は、産業性と造形芸術性とを併せ持ち、時に別ものとされ、時にはないまぜに扱われる、解り難い性質を抱えていることを前提に、当地工芸近代の道程をたどってみよう。

「明治五年三月、大蔵省御用ニ付山尾次六東京ニ登り御注文被仰付テ、曰、金沢ハ数代象眼名譽之國ニテ、今又、銅器花生ニ象眼入テ出来候為ト被仰付候也」〔金沢銅器製造元記〕。明治政府から象嵌の得意な金沢に、明治6年開催のウィーン万博への出品要請があり、藩政期のものづくりは、この注文を契機に近代工芸へと脱皮、再出発し始めたのだった。結果、旧藩白銀師山尾たち工人は、大型の薄端（花器）9対や鉢類に指定の象嵌意匠を施し、同6

年3月、無事納品している。

ウィーン万博に派遣された政府官員納富介次郎は、以降の万博出品や工芸産業を、図案の調製配布などによって督励指導した中心人物だったと知れたのは、平成年代に入ってから工芸再検証調査によってである。納富は明治15年、農商務省地方巡回教師として来県、逗留した金沢を拠点に旺盛な指導を行い、同19年にも来沢、翌20年金沢区工業学校を創設して校長に就き、当地の工芸産業振興に功績の高かったことは良く知られる。彼は、在来産地に合理的分業体制を敷き、製品製造の量産化、産業化の基盤構築を図ろうとする勢力の中にいた能吏であった。動力も機械も未整備な時代、納富の工芸振興に寄せる公利的信念は、維新以来ひたすら富国強兵を目指した明治日本の悲願と重なっていた。

金沢が新生政府から技に長けた名譽之國と一目置かれたのは、層の厚い工芸技能蓄積の賜であった。しかし前田家一統は東京に移り、武家の需要が支えた仕事も叙れるばかりで、金沢が納富に工芸振興の策を託したのは、浅からぬ機縁も手伝った自然の

1868	明治維新
1871	廣澤置興により金沢県へ
1872	県庁・美川へ・金沢区万開拓所設置 (のちの石川県勸業試験場) 光仙窯開窯
1876	兼六園内に金沢博物館開館
1880	日本武尊銅像建立
1882	納富介二郎、陶芸指導に来県 金沢九谷陶画工同盟会結成
1887	金沢区工業学校(現石川県立工業高校)創立
1889	金沢に市制がしかれる
1890	第三回内国勸業博覧会にて美術工業が誕生
1898	陸軍第九師団を金沢に設置 金沢駅開業
1900	金沢勸業博物館、 石川県物産陳列館と改称
1914	第一次世界大戦勃発 大西陶磁器顔料設立
1917	金沢美術倶楽部創立
1918	物産陳列館、石川県商品陳列所と改称
1920	金沢市意匠図案研究会 (現金沢市工芸協会)発足
1931	柳宗悦「工藝」創刊
1932	「産業と観光の大博覧会」開催
1939	第二次世界大戦勃発
1945	終戦 第一次石川県立美術館開館 石川県美術文化協会設立
1946	金沢美術工芸専門学校開校

成り行きだったと思われる。実践型官吏の納富は、在来技術の近代化を目指す地方主義とでも言うべき理念の具現化を、金沢で展開したのだった。金沢は当初から中央官界と結びついて、以降も東京との関係深く支援指導を仰ぐ姿勢が顕著で、金沢と納富との関わりは、その象徴的動向であった。以来、納富の足跡の影響は長く続き、例えば、創設した工業学校からは多くの東京美術学校進学者が途切れなく排出して、後年、金沢に出向き工芸指導に尽力した者は少なくない。昭和前期には、美術行政官僚でもあった正木美術学校校長も定期的に来沢、最新の工芸情報をもたらし、金沢は常に中央の動静に接し続けていた。

また敗戦直後、金沢市が美術工芸専門学校の開校に及んだのは、工業学校の実績があればこそのことだっただろう。そう考えれば、美術専門学校としての設置申請が美術工芸専門学校となつて認可されてきた謎も、少しは

解消する。東京と京都の美術学校とは別して、国は金沢に、地域工芸振興の専門教育もすべしと、背を押したのだと思われる。そして初代学校長は、東京美術学校教授だった森田亀之助に託されている。

納富と金沢の関係にかこつけて概観したように、専ら武家社会に息づいていた金沢の工芸が維新後は政府の意向に従い、官の支援指導を求めたのは、前時代、仕事は藩の監理下にあったことも遠因の一つだろう。金沢は自ら仕事の領域を拡げてマネジメントの才覚を発揮する機運に薄く、機械生産型に転換していく業態を持たぬまま、近代工業の創出都市とはならず、高度な手技を伝えて今に至り、工芸都市の途をたどった。東京、京都と違い、加賀金沢の工芸は、いつも与えられて成り立つ少々過保護な環境にあったと思しく、納富の奮闘にも係わらず、職能の可能性を能動的に発展させようとする気概には乏しかったように映る。

ここまで、金沢の工芸は政府や中央機関の支援指導に恃むところ大であったことを見てきた。工芸が国富の要だった20世紀

発揚を、地域に活かそうと目指す初めての取り組みであった。市は工芸の時代動向には無頓着だったものの、工芸工房を企画部に創り、優れた当地の工芸とそのイメージを政策に反映させる体制を、全国に先駆けて整備したことは評価に値する。

工芸工房開設から既に30余年、今また国立工芸館が開館して、金沢は工芸のメッカとしての性格をますます高め、一段と工芸の街の自負を高めているように映る。しかし実態は産業的工芸生産は年ごとに減ずる一方にあり、上向くことはもうないであろう。だが金沢の工芸にそんな気配を覚えることが少ないのは、この地の工芸は一品制作に近く、商品と言うより作品的性格が強いからに他ならない。金沢らしい印象の濃い金箔も、最大の需要先である仏壇業界の縮小が製造を激減させていて、同様な例は枚挙に暇なく、産業性を帯びる工芸の現況は危機的状況のなかにある。金沢市や石川県は、今も

に入る頃まで、たのみの狙いはひとえに産業的振興にあった。しかし以降は、芸術としての自律的創作指向も高まり、産業であり芸術でもある両義性が顕著になっていった。そして21世紀、平成を経て、工芸の意



味や価値はさらに多様性を拡げ始めている。工業生産の拡張が国の成長を支えていた時代の終焉は、工業都市とはならなかった金沢の都市政策に、工芸の持つ人くささをアドバンテージとして活かし反映させる機会の到来であるようにも思われる。

市制100周年目の平成元年、金沢卯辰山工芸工房は産業性を指向しない工芸機関として、作家養成を主目的に設けられた。金沢が産業の進展に懸念だった時代から1世紀、金沢市は、工芸の造形芸術性に焦点をあてた施策を展開し始めたわけである。昭和21年開校の金沢美術工芸大学は当初、陶磁、漆工、金工科を置き、後に染織を加えた工芸専攻を平成8年まで産業美術学科に据えて、形式的とは言え産業の名を残していた。従って工芸工房は、産業性は棚上げして工芸の芸術的性向の文化的

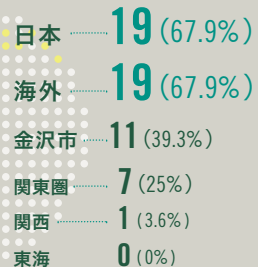
工芸産業の支援に厚いとは言え、職能が無くならないレベルの維持に汲々としているようで苦勞が偲ばれる。一方、金沢に数多い作家による芸術の仕事は、この先もまず廃れることはないであろうから、工芸の両

義性は、非常にアンバランスな内情を抱えている実態がある。ではさて、金沢の工芸はこうした情況とどのように向き合うことが、今後の価値に繋がっていくのだろう。今日、工芸はモノとしてではなく、ソフトとして文化的歴史的属性を喧伝する扱いが盛んである。政府主導で展開し始めた文化財の観光的活用推進にも似て、工芸体験、工房見学、教養講座等々、工芸品需要が減ずるなか、工芸の情報だけが消費対象となっている観が強い。しかし留意すべきは、産業であれ芸術であれ、振興の要は、工芸の知的情報や華麗なイメージを小手先で消費させることにはなく、あくまでも正しい、使い鑑賞してもらうことにある。それが行政の施策であるなら、特に製品の支援には、少なくとも購入のモチベーションを喚起する知恵や工夫を伴う企画であるべきであろう。

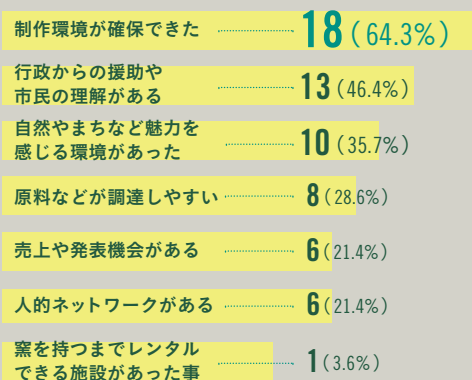
山崎達文(やまざき・たつふみ)
1951年東京生まれ。勤めを辞して金沢美術工芸大学(漆芸)入学。同大学院修了。卯辰山工芸工房、金沢美大等を経て金沢学院大学教授。工芸史・博物館学等を担当。現在同大名言教授。

1989	金沢卯辰山工芸工房開所
	金沢工芸大賞コンペティション開始
1995	〈金沢世界都市構想〉策定
	世界工芸都市宣言
1996	金沢職人大学・金沢市民芸術村開館
1999	金沢創造都市会議／金沢学会開催
2004	金沢21世紀美術館開館
2005	金沢ファッション産業創造機構創設
2008	希少伝統工芸専門塾開講
	金沢創造都市推進委員会発足
2009	ユネスコクラフト創造都市に認定
	〈金沢市のづくり基本条例〉制定
2010	世界工芸トリエンナーレ初開催
2011	ファッション産業創造機構、
	金沢クラフトビジネス創造機構に改編
2015	北陸新幹線、金沢まで開通
2017	KOGE Art Fair Kanazawa初開催
	金澤町家職人工房開設
2020	新型コロナウイルスによるパンデミック
	国立工芸館開館

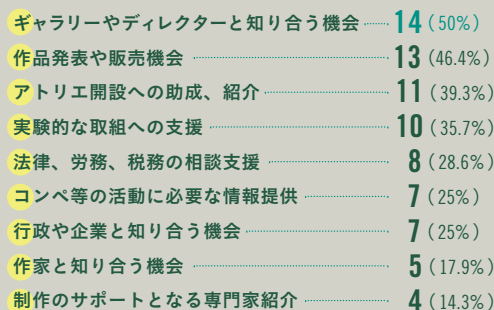
Q11. 今後将来的にどこで発表活動していきたいですか？
(複数回答)



Q12. 金沢で活動することに、特に影響しているのは何ですか？
(複数回答)



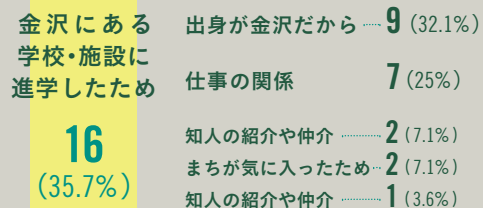
Q13. 活動をする上で現在必要だと感じる支援は？
(複数回答)



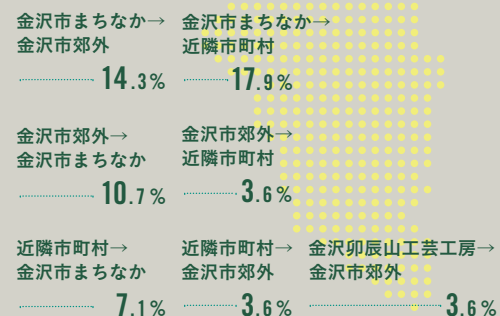
石川県外の工芸や日本の工芸史の知識、学習機会の支援
／トラブル相談窓口／各種事務へのサポートや相談
／コンペが増えるといいなと思います

1 (3.6%)

Q8. 金沢を拠点に制作を始めたきっかけは何ですか？
(複数回答)



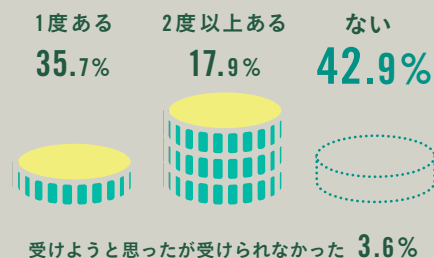
Q9. 金沢を拠点に制作を始めた時と現在で、アトリエは変わっていますか？



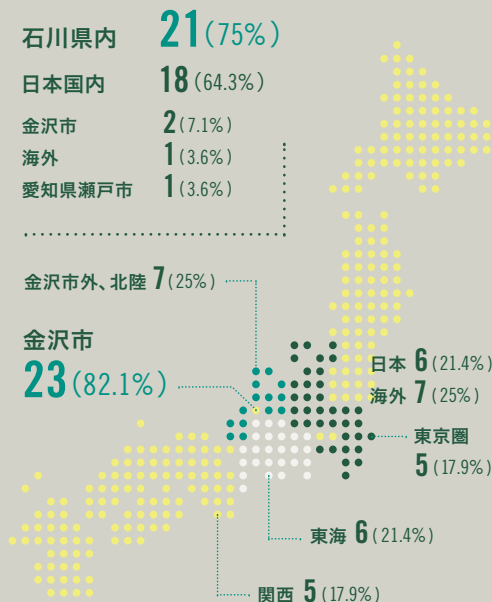
変わっていない 35.7%

※ 近隣市町村：津幡、内灘、能美、小松、富山など

Q10. 金沢市から制作に関し、助成や支援を受けたことがありますか？

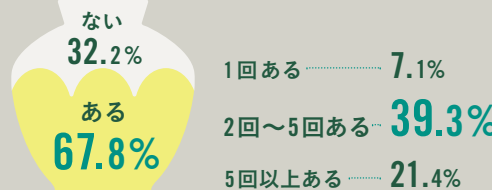


Q4. 材料はどこで買っていますか？
(複数回答)



Q5. 主にどこで発表活動をしていますか？
(複数回答)

Q6. 金沢市主催のイベントに参加し作品発表をしたことがありますか？



Q7. 金沢を拠点に制作をして何年ですか？



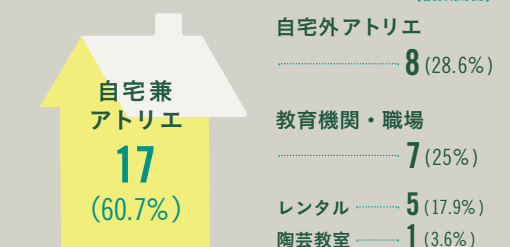
実際に金沢を拠点に活動している陶芸家はどのような制作環境にあるのか？
その実態をアンケートで聞いてみた。
(アンケート募集期間：2021年9月7日～29日)

Q1.

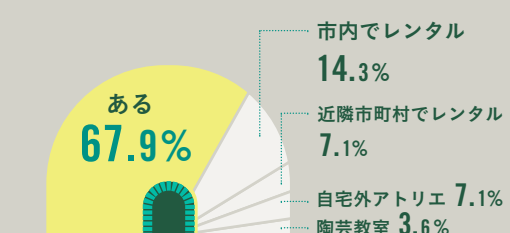
陶芸で何を中心に制作・発表をしていますか？
(複数回答)



Q2. 現在制作はどこでしていますか？
(複数回答)



Q3. 自宅に窯はありますか？



4 金沢21世紀工芸祭2021

2021年11月26・27・28日の3日間に市内各所で開催される
「金沢21世紀工芸祭2021」のイベントを紹介する。

期間中はスタンプリーや茶会展示もあり、
改めてじっくりと「金沢と工芸」を考える
きっかけにしてほしい。

茶／チャ



冊子「土に紐づく」制作

5000部限定にて、「金沢21世紀工芸祭2021」全体の参照となる冊子を無料配布します。

配布先 金沢市内各所



TOUR ガイドと赴く、工芸タイムトラベル

参加無料・定員7名・要予約
11/3より申込開始
所要時間 約1時間半
※工芸祭ウェブサイトよりお申込み下さい

11/26 金	県立工業高校、九谷光仙窯	13時～
11/27 土	宝円寺、月心寺	13時～
11/28 日	大西陶磁器顔料跡	10時～
11/28 日	金沢区方開拓所跡、成巽閣	13時～

工芸スポット紹介

市内の工芸ゆかりのスポット約10箇所に提灯を設置し紹介します。スタンプを集めて全部巡った方にはオリジナル手ぬぐいを抽選でプレゼント！

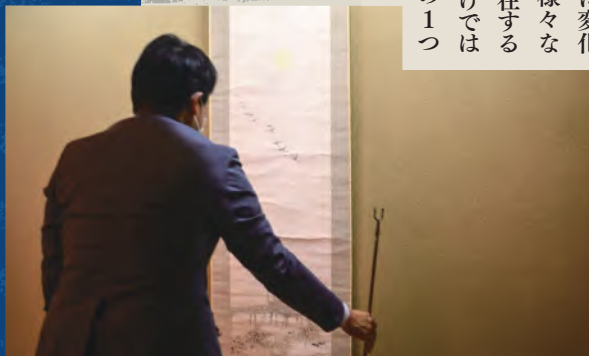


ONLINE

趣膳食彩

Shuzen Shokusai

浅田屋 × 石黒商店



金沢の大事な工芸の支え手の1つに、料理屋があります。彼らは代々道具、古美術を所有し、食事の器や空間に使い続けてきました。

それを支えたのは道具のコーディネートや維持管理を行う道具屋等です。激動の時代を乗り越えながら、料理屋にまつわる「工芸」がどのように変化をしてきたのか、様々な食の風景の中に存在する工芸と、工芸作家だけではない、工芸の流れの1つを紹介します。

INTERVIEW

工芸祭ウェブサイトと冊子「土に紐づく」にて取材記事を紹介します。

料理屋と道具 ▶ 浅田屋 × 石黒商店、大友楼、つば基
道具の修繕 ▶ 山本清芳堂(表具師)

協力 金沢芽生会

工芸回廊

Kogei Kairo



工芸タイムトラベル「歴史と信仰の巡礼ルート」イラスト：chisako tabuchi

なぜ金沢は他でもなく工芸だったのか？
まちなかにひそむの工芸ゆかりのスポットを、冊子とツアーで紹介します。工芸を支えてきた政治、教育機関、そして市井の人々を物語りながら、その環境を見つめます。

EXHIBITION 1

「時間と寸法」に着目し、茶道の時間、そして茶人が目指すお茶の寸法を映像作家のさわひらき、映像ワークショップとともに映像インスタレーションで表現します。

作家 さわひらき、映像ワークショップ
日程 11/26 金～11/28 日
時間 10時～20時 入場無料
会場 里見町APARTMENT 303

LECTURE

茶の湯研究者である廣田吉崇氏の講演会を開催。流派の系譜やそれぞれの違い、茶道の変化についてお話し頂きます。

日程 11/27 土14時～ 参加無料・要予約
講師 廣田吉崇(茶の湯研究者)
会場 里見町APARTMENT 303

EXHIBITION 2

金沢の茶の湯を育んできた方々の言葉や、過去の資料などを紐解き、当地に息づく文化の奥深さを紹介します。

日程 11/26 金～11/28 日
時間 10時～16時 入場無料
会場 旧中村邸

工芸はその土地の素材によってもものを作る、原始的な技術です。今回は山での土採集から土づくり、穴窯での焼成までを一貫して行う昔ながらの陶芸体験を提供します。

WORKSHOP 土採集から焼成まで

要予約 満席となりました

第1回 土採集 | 10/2 土
第2回 うつわ制作 | 10/9 土
第3回 穴窯焼成見学 | 11/6 土
定員 親子向け5組10名
協力 戸出雅彦、吉村安司、金沢卯辰山工芸工房

WS完成品は11/26金～28日に金沢アートゲミホワイエにて展示引き渡します。

金沢みらい茶会

Kanazawa Mirai Chakai



EXHIBITION 1 | 協力 成巽閣

藩政期より金沢では「茶道」が親しまれてきました。為政者、数寄者そして女性と、時代のうねりの中で担い手が変化しつつも、幅広い階層の人々が集まり、フラットに美を共有する「場」として機能してきました。

今年の金沢みらい茶会では今回のために制作した映像展示と流派についてのレクチャー、そして金沢の茶の湯を育んできた方々の言葉や過去の資料等を展示します。

金沢みらい工芸部

Kanazawa Mirai Kogei-bu

卯辰山の原土





新しいと古いを織り交ぜた、
浅田屋らしい器の取り合わせ

土屋 そうですね。ただ今では祖父の世代のように、積極的に道具屋さんと情報交換したりということまではない。市内の他の料理屋でも、僕らの代でパンパンお道具を買い換えることはほとんどないでしょうね。既に道具を持っ

石黒 色々探し回ったと聞きます。お道具にはそういった流転があり、物語がありますね。なかなか元の所有者の手にまた戻る例は多くないように思いますが、屏風絵はタイミングもよかったですね。既に道具を持っ

浅田 え、初めて聞きました。土屋 おじいさま同士の仲がよかったんですね。また、石亭には祖父が入って買った棟方志功の風神雷神の屏風絵があるんですが、経営が苦しかった時に手放して、また経営が良くなったタイミングで石黒さんに全国を探してもらって買い戻したものだと思っています。

浅田 浅田屋の各部屋の入り口に、部屋の名前を筆で書いた板が張ってあるんですけど、実はあれも太朗さんのおじいさまが書いたそうです。

土屋 代々のお道具が蓄積されること、金沢の老舗の強みですね。自分で主体的に「うちにはこんなお道具があります」と宣伝していくことはいませんが、金沢において「工芸の歴史が積み重なっていく場所」であるということ、を若い人たち、海外の人たちに発信していく必要があるとは思っています。

浅田 昔ある雑誌が「料亭のお宝拝見」という記事をやりたいと言ってきた事はあるんですが、「うちにこんな良いものがありますよ」という体では言わないですね。商工会議所の100年以上続く老舗による「金澤老舗百年會」の企画では展示等で出すことがあるくらい。

土屋 それは料理屋さんだけじゃなくて、金沢の100年企業が昔から持っ

浅田 土屋 代々のお道具が蓄積されること、金沢の老舗の強みですね。自分で主体的に「うちにはこんなお道具があります」と宣伝していくことはいませんが、金沢において「工芸の歴史が積み重なっていく場所」であるということ、を若い人たち、海外の人たちに発信していく必要があるとは思っています。

浅田 昔ある雑誌が「料亭のお宝拝見」という記事をやりたいと言ってきた事はあるんですが、「うちにこんな良いものがありますよ」という体では言わないですね。商工会議所の100年以上続く老舗による「金澤老舗百年會」の企画では展示等で出すことがあるくらい。

土屋 代々のお道具が蓄積されること、金沢の老舗の強みですね。自分で主体的に「うちにはこんなお道具があります」と宣伝していくことはいませんが、金沢において「工芸の歴史が積み重なっていく場所」であるということ、を若い人たち、海外の人たちに発信していく必要があるとは思っています。

料理屋に受け継がれる道具

土屋 代々のお道具が蓄積されること、金沢の老舗の強みですね。自分で主体的に「うちにはこんなお道具があります」と宣伝していくことはいませんが、金沢において「工芸の歴史が積み重なっていく場所」であるということ、を若い人たち、海外の人たちに発信していく必要があるとは思っています。

浅田 土屋 代々のお道具が蓄積されること、金沢の老舗の強みですね。自分で主体的に「うちにはこんなお道具があります」と宣伝していくことはいませんが、金沢において「工芸の歴史が積み重なっていく場所」であるということ、を若い人たち、海外の人たちに発信していく必要があるとは思っています。

浅田 土屋 代々のお道具が蓄積されること、金沢の老舗の強みですね。自分で主体的に「うちにはこんなお道具があります」と宣伝していくことはいませんが、金沢において「工芸の歴史が積み重なっていく場所」であるということ、を若い人たち、海外の人たちに発信していく必要があるとは思っています。

浅田 土屋 代々のお道具が蓄積されること、金沢の老舗の強みですね。自分で主体的に「うちにはこんなお道具があります」と宣伝していくことはいませんが、金沢において「工芸の歴史が積み重なっていく場所」であるということ、を若い人たち、海外の人たちに発信していく必要があるとは思っています。

浅田 土屋 代々のお道具が蓄積されること、金沢の老舗の強みですね。自分で主体的に「うちにはこんなお道具があります」と宣伝していくことはいませんが、金沢において「工芸の歴史が積み重なっていく場所」であるということ、を若い人たち、海外の人たちに発信していく必要があるとは思っています。



弁柄の赤が華やかな石黒商店外観



— Vol.1 —

浅田久太
浅田屋
×
石黒太朗
石黒商店

聞き手：
土屋兵衛（金城楼）

金沢の大事な工芸の支え手の一つに、料理屋があります。彼らは代々道具・古美術を所有し、食事の器や空間の中で使い続けてきました。それを支えたのは道具のコーディネートや維持管理を行う道具屋やそれぞれの素材毎の職人、修復士等です。激動の時代を乗り越えながら、料理屋周辺の「工芸」がどのように変化してきたのか、様々な食の風景の中に存在する工芸と、工芸作家だけではない、工芸の流れの一つを紹介致します。

浅田屋さんでの石黒さんの役割

しゃいますよね。

土屋 うちでも、かつてはお道具屋さんと連携して道具の維持管理や季節毎のしつらえをお願いしていたのですが、僕の父の代からそれをしなくなり、自分たちで全て行うようになりました。その点、石黒さんと浅田屋さんは今でも関係をしっかりと続けていらっ



部屋に飾る作品を吟味する2人
(左・石黒さん、右・浅田さん)

石黒 ありがたいことにそうさせて頂いています。こちらからそろそろかな、とタイミングを計ってご連絡して、お客さんがいない時の1〜2時間で変えていますね。

作品名や作家、年代を必ず尋ねられまし、箱書がないとわからないものも多いので、立ち会ってもらったり、この組み合わせで違和感がないか確認いただいたり。

土屋 そういうお料理屋さんへのアドバイザー的役割も、お道具屋さんの役割としてありますよね。お客様に深掘りされた時、「お道具屋さんに聞けばわかる」というのは大きい。

浅田 そうなんです。ただ石黒さんはメンテナンスや、取材等相談に都度来てくださるけどお金の請求はなく、その「悪いな」という気持ちが積み重なっていく部分はあります。笑

正札市に伺ったり、あとお店同士の距離も近いので、たまにお客様を石黒さんのお店にお連れして買っていたり。そういう風に恩返しもしつつ、

いうことをメモして「うつわブック」のようなものを作ります。本当はそれに、作家名と年代と価格を入りたい。スタッフに、それぞれの器がどのくらいの価値があるのかということをおわかっていて欲しいです。

料理屋・料理人が求める道具

浅田 金沢は400年戦災に遭わず、その間いろんな職人さんを京都等から招いて育てたというところが大きいですよ。うちの両親は大樋さんの湯飲みに福光屋さんのお酒をとってレンジでチンするんですよ。地元の人が聞くところによめいちゃんですが、それが金沢。日常的に「使う」「壊す」「作る」が金沢の工芸の基本になると思ってます。

土屋 戦後はお料理屋さんがお道具屋さんのメインの客層だったのが、今はどちらかというとお茶人さん。作家たちも茶道具を作るようになってきています。

料理屋について、それぞれのお料理屋さんの中がどうなってるのか、必要な器はどういうものかはとくに今の作家はなかなかわからないでしょうね。

浅田 そうですね。料理屋は広間ベースで考えるので、うつわはまずある程度数がほしいです。20も揃う古いものはなかなかないので、10が二つあったら交互に使うなどしています。今の作家で20、30と揃いのものを作ろうという人はなかなかいない。

以前、クラフトビジネス創造機構の新木さんが若手作家を連れて懐石料理の流れを知ってもらうという勉強会を石亭でやってくれました。出てくるうつわを都度料理長が説明して、最後に食器庫に案内し、どう保管されるかというバックヤードツアーも込みで。作家には「こういう料理に出すから蓋付が良いんですね」とか「縁がこうなっているとわれやすい」とかいうことを実際見てもらいました。

石黒 いい取り組みですね。

浅田 そういったうつわの話で言うと、九谷焼には特別にこだわっているわけではないです。

土屋 確かに、一般的に九谷の割合は多くないかもしれない。お料理を盛り付けるのが九谷は難しいんですよ。実は色絵より、青磁、粉引、京焼など

の色が使いやすいです。

浅田 料理人の思いと作家さんの思いのすり合わせを誰かにしてほしいなと思います。ふとした時に料理人が「これ使いづらい」と言うのを、作家さんに聞かせてあげたいです。それがクリアになったら、もっと作家ものを料理屋で扱いやすくなるはずですし。

新しいお料理屋さんが絶対手に入らないものって『歴史』なんですよ。中には、古いアンティークのものを和食の中心に上手く取り入れているところもあります。新しくお店を始めるお料理屋さんがそういったお店をお手本にして、最終的に石黒さんのようなお道具屋さんで買う、という工芸の持つ時の流れがあると良いなと思います。



浅田久太
（あさだ・きゅうた / 左）

金沢市生まれ1995年、株式会社浅田屋入社。店長、総支配人などを経て2012年代表取締役社長に就任。浅田屋16代目となる。「金沢市料理業組合」会長、「金沢市旅館ホテル協同組合」理事長なども務める。

「浅田屋」金沢市十間町23
asada-ya.co.jp/ryokan

石黒太郎
（いしぐろ・たろう / 右）

金沢市生まれ。株式会社石黒商店4代目代表。主に古美術や茶道具、近代工芸や地元と縁のある作家作品などを取り扱う。金沢美術商協同組合理事（株）金沢美術倶楽部専務ほかに従事。

「石黒商店」金沢市十間町53
ishiguroshoten.jp

食趣膳 — Vol.2 —

大友佐俊
大友楼

鐔正美
つば甚

金沢の大事な工芸の支え手の一つに、料理屋があります。

彼らは代々道具・古美術を所有し、

食事の器や空間の中で使い続けてきました。

それを支えたのは道具のコーディネートや維持管理を行う道具屋やそれぞれの素材毎の職人、修復士等です。

浅田屋さんや石黒商店という料理屋と道具屋の関係以外の、金沢の老舗料理屋における工芸の歴史や流れを紹介致します。

料理屋の変遷について教えてください。

大友 時代の変遷による起伏に則って、我々料理屋は商売を色々と変えてきました。昭和30年くらいまでは料理

屋はすごく儲かって、私の祖父が一番良い時。陸軍第9師団が金沢に設置され、軍隊の色々な宴席がもたらされた。昭和40年くらい、川魚を専門にした影船やゴリなどの専門店が閉じる中で、台頭してきたのが割烹系。カウンターから始まり料理屋形式に少しず

つしていったところが新しく芽生えた代わりに、古くからの宴会や会合に焦点を置いたところがみんな沈んでいった。

料理屋で生き残ったのは結婚式場なり新しい方に目がいったところと、館をきちんと整備したところ。店には保（も）つ理由がある。私のところは、料理屋と駅弁の二つの車輪を抱えるから、料理屋が廃っても、その分駅弁で。観光客や旅客が増えて、車内販売もやって稼ぐことができました。

鐔 つば甚は創業約270年。藩内の重臣や戦後GHQ、文人墨客など県内外から多くのお客さまがいらっしゃる中で、建築や空間の使われ方は時代に合わせて変化していったと聞いています。

現在金沢で大きな結婚式や法事など、百名を超える宴会ができる料理屋は金城楼さんと私どもの店だと思えます。200畳ひとつづきの大広間もあり、大勢のお客様をお迎えさせていただいています。100人でもそれぞれ10品お出しすると、それぞれにお膳、箸置き、椀、机椅子含めて必要ですので道具の準備や管理は本当に大変です。

工芸や道具屋とのお付き合いを教えてください。

大友 昭和60年くらいまでは道具屋が、料理屋など資力のあるところに、「掛物がありますよ」「琳派がありますよ」と出入りしてたんです。でも景気や法整備など時代が変わって新しく工芸品を買い替えるよりは、祖父の時代からの持ち物を自分たちで管理して、大事に使うようになっていくというのが現状でしょうね。

道具屋さんや料理屋さんは目が効かないと商売ができない。なぜかという掛物一つでもお客さんに聞かれるし、季節によっても全然違う。僕は祖父から教わって、お手入れの仕方から蔵の中にどういふものがあるかまで全部わかる。そういうものを自分で確かめて、美術館で確かめて、うちにあるものは偽物、本物、とか大体見えるようになった。例えば磁器がどう採られて加工されてーそこから勉強して、いろんなものが相対的にそんな狂うことなく判断できるまで30年かかる。

鐔 元々はお道具屋さんが入って工芸品の管理頂いていましたが、戦後宴会

のスタイルが変わっていく中で自分たちでやるようになったと聞いています。

私も日々忙しいなか、店にある掛け軸について調べたものをノートにまとめて整理していきました。読めなかった字も読めるようになってきますし、作家さんや時代背景も覚えてくる。結婚して40年経った今は一覧になっていて、季節に合わせて何をしたらおうかというのはそれを参照しつつ、自分達で行っています。この季節にこれはおかしい、という道具や工芸の取り合わせは気付く人は必ずいらっしゃいますし、お茶を学ぶ中でその点は勉強していていますね。

モノのよしあしは勿論目を効かせないといけないですね。でもとくに今は辞典やネットで調べれば工芸の情報が色々出てきます。お道具屋さんにも毎回あれこれお尋ねしなくてもある程度分かるようになっていっています。ただなかなか探しているけど見当たらない道具や工芸品の手配だったり、今ある工芸品の修繕だったり、道具屋さんにご相談してうまくいくことも多いです。探していた籠花入も1年かけて見つけて頂いて手に入れることができました。道具屋さんには単純にモノだけ

ではなく、時代背景そのものを管理していただけます。

お店にあるお気に入りの工芸は？

大友 保管しているものの中でお気に入りなのは、レシビやね。うちには、料理屋を始めた幕末の頃の、加賀藩の料理の手書きのレシビ、献立集がたくさんあります。歴代の料理頭が書いたもので、「この味噌はこれとこれを合わせる」とか「この食べ合わせはダメ」とか書き留めてある。

それから道具とは違うかも知らんけど、40年ほど前の食と緑の博覧会の時に、加賀藩の食のルーツを神に捧げるということ、県に言われて実際に作った加賀料理を全部蠟細工で仕立てて展示したことがある。お礼はいらんから、代わりに蠟細工を頂戴と言ってもらったのがこれ。デパートの物産展とかに加賀藩の食を発信するには、しばらくこの蠟細工が役に立った。自分のうちだけのことではない、それぐらの気持ちで物事をやってみるつもりなだけけれども、これだけグローバルす

ると金沢の食から逸脱してる料理屋がたくさんあると感じる。

鰐 私に気に入っているのは古い九谷焼ですね。前田藩の来店時に使っていた美しい菊の模様の入った九谷焼があつて、調べたら明治時期の再興九谷のものでした。そういう情報を知ると愛着が湧いてきますし、工芸がお好きなお客様にお出ししてお話すると喜ばれます。

老舗料理屋の提供する工芸は、実際に使ってきたものが残っています。古物は移動して色々な持ち主の手に渡りますし、新しい割烹さんは古いうつわを求めて使っているところがあり素敵ですね。それはそれでいいですが、料亭にあるものはその店の中で育まれてきたもの。私達は店の中でうつわの物語を紡ぎ出してきたとも言えるかもしれません。工芸って面白いものです。

大友佐俊（おともさとし）

金沢市生まれ。京都「菊水」や岡山「三好野井当店」を経て1974年大友楼入社。1982年代表取締役就任、大友楼7代目。

（一社）県食品協会副会長、金沢老舗百年会副会長なども務める。

「大友楼」金沢市尾山町2-27
ootomou.co.jp

鰐正美（つば・まさみ）

金沢市生まれ。株式会社つば甚代表取締役就任、16代目女将。

「つば甚」金沢市寺町5丁目1-8
tsubajin.co.jp

食趣膳 Vol. 3

山本幸雄
山本清芳堂

聞き手：
土屋兵衛（金城楼）

金沢の大事な工芸の支え手の一つに、料理屋があります。彼らは代々道具・古美術を所有し、食事の器や空間の中で使い続けてきました。それを支えたのは道具のコーディネートや維持管理を行う道具屋やそれぞれの素材毎の職人、修復士等です。藩政期以降、料理屋の周りにある「工芸」がどのように変化してきたのか。代々料理屋が所有する工芸から文化財修復も手掛ける、表具師という工芸の流れの1つを紹介致します

金城楼蔵・細野燕台の扁額修復

土屋 細野燕台の扁額修復をありがとうございます。この額は元々祖父が求めたものだったんですが、蔵ですつと眠っていて、状態も良好とは言えず……お手数お掛け致しました。

山本 虫食いと破れがひどくて。笑 修復を頼まれたのは3、4ヶ月前でし

たかね。実際の作業は集中して2週間くらいで仕上げました。

篆書体で、右から審、音、知、楽。燕台の扁額は現代もよく見えますけど、こんな大きいのは私も初めて見るわ。本紙の紙質がは羽二重、続本というんやけど。続本は絹本より劣化が早いから、次の100年経ったら粉になって修復不可能になるでしょうね。文字のところはドーサで止めたんです。紫



細野燕台《審音知楽》金城楼蔵

外線を吸収する部分は特に劣化が早く、字がなくなってくる。全体の紙本にもドーサを引きました。そうしないと、ちよつと触っただけで粉が浮き上がる。それを止めるために埃を除去して、水洗いしてからドーサを2回ほど。それから裏打ちをめぐって、サケドメ。裏打ちを2回して、ウケカケをする。普通は押さえ貼りですけど、それだとまた外れてきます。100年でも剥がれないように施工のやり方を変えてます。最近は気候変動で気温40度近いこともあって、今までにないくらいに劣化が早くなっているの。

土屋 なるほど、地球温暖化の影響が工芸品の保管・維持という点で関わってくるんですね。

文化財修復の難しさ

山本 昔と比べると全然気温も湿度も違うよ。

修復を仲間の人と一緒にさせてもらった時も下から見てる分にはわかんけど、天井から下ろすと絵が凄く裂けとって、せつかくの岩絵具がバラバラ落ちるんですよ。毎朝絵具を官司さ

んが掃いてたくらい。元々は前田家の別邸、金谷御殿にあった天井を尾山神社に移築したもので、加賀藩の御用絵師佐々木泉景が書いたんですよ。大聖寺出身のバリバリの狩野派ですよ。でも200年後にこんな気候状況になると想定したらんでしょうし、後世に残していくことを考えると今我々がカバーしてやららないとね。まず剥落止めでそれをストップさせました。

土屋 江戸時代から現在、そしてこれからのことを考えると、修理の仕事には終わりがいいですね。

山本 前にアメリカ人がカリフォルニア州にある掛軸を直して欲しいと言ってきたことがあるけど、「そんな暑いところで掛け軸は無理ですから、持たんことや」と答えました。そういう気候風土では掛軸はなかなか難しい。

平等院鳳凰堂も何回か修理に行ってたね。鳳凰堂も元の鳳凰堂の扉は真っ黒で何が書いてあるかわからんですが、X線と赤外線で見たら絵の痕跡がわかる。つまり人間が何にもせんでも、経年で防ぎようなく自然に真っ黒になっていく。同じように、昔はキンキラキンやった仏像も黒くなる。

んから、何していいかわからなかったね。年中休みなしがずっと続いて。でもその頃はバブルの最盛期で、とにかく県内、県外から掛け軸の依頼が来ました。書道家、お茶人、お寺から何から。そもそも修繕を始めたのは、800年前の鎌倉時代の曼荼羅を修理してくれと依頼があって。古いものの扱いが当時あまり上手じゃなかったんで、岡墨光堂という日本一の修復師の弟子にア

ドバイスもらっている中で、「これは修理は本格的に勉強せないかな」と考えた。それから四十一歳のとき、文化財保存修復学会というところに表具屋として石川県で最初に入って、全国の学会へ行つて、本格的に文化財修理を出しました。勉強しながらやり方を覚えていきましたね。金沢の同じ表具屋でもこういう修復の仕事はやっている人がおらんくて、勉強しながら覚えていったわ。

仕事も習い事も、工芸の感覚で

土屋 なるほど、文化財修理などは當代からだったんですね。
山本さんは、美術品の修理だけでなく、伝統工芸展にも出されていますよね。

山本 漆芸家の坂下直人に、「山本くん一閑張やらんか」と言われたのがきっかけです。「表具屋はそんなことやらんで良いと思いますけど」と言ったら「それだと出世せん」と。じゃあやります」

文化財の場合はコスト度外視でも現状維持に努めるけど、民間の場合はメンテナンス安くかつ長持ちさせたい考えですし、神社やお寺の場合はバランス見ながら、それぞれの場合がある。みんな維持・管理に関しては割と無関心ですから。

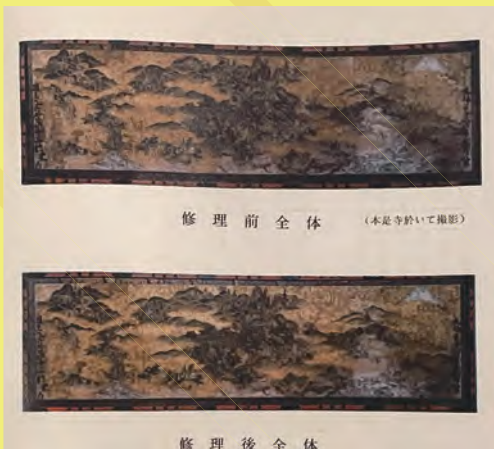
その点、常福寺にある北方心泉記念館は私主導で設備を完璧に仕上げました。お寺に沢山あった北方心泉の資料群が金沢市の指定文化財になって、色々助成金申請ができて。世にある蔵がみんなあんなったら素晴らしいね。

土屋 なるほど。改めてお話し伺っていると山本さんによって沢山の美術品が救われてきたんだと、感動します。元々修繕のお仕事をされていたのでしょうか？

山本 いや、父も表具師でしたが襖と障子張りのみで、美術品の専門になったのは私の代から。丁稚先の京都の親方は美術品専門の表具屋さんだったけど、全然仕事を教えてくれなくて。金沢に戻ってきてもほぼ仕事を習ったら



「福富長者物語」常福寺蔵



金沢市指定文化財「身延山全景俯瞰図」(本是寺蔵)
修繕前・修繕後

は毎日の残業で休みなし。「一つのことしかできんやつはそれしかできんけど、あれもこれも上手いやつは何やつでも上手い」と言われるほどなと思って、工芸の感覚と繊細さと修復に結びつけたりしています。漢文は17年目になって、燕台の漢詩を読んだように、ちよつとわかるようになった。それも表具屋するには必要な武器かなと。自分のためじゃなしに人様のために。

土屋 スケールが大きいですね。
これからもうちにある美術品の修理や相談、宜しくお願いします。

山本幸雄 (やまもと・ゆきお)

1946年金沢市生まれ、山本清芳堂の表具師。作家名は山本幸巨。1996年日本工芸会正会員認定。正行寺換給修復、浄土寺障壁画修復、平等院鳳凰堂剥落止など多数の修復を手がける。

「山本清芳堂」金沢市大手町10・24

土屋兵衛 (つちや・ひょうえ)

1975年金沢市生まれ。銀座フランス料理店、吉兆西洋銀座店での修行を経て、現在料亭金城樓5代目主人。2015年金沢芽生会会長就任、2021年全国芽生会連合会副理事長就任。

「金城楼」金沢市橋場町2・2・23
kinjoh.co.jp

金城楼正面玄関



工芸タイムトラベル

工芸都市と言われるようになった通り、
金沢市内には工芸にゆかりのスポットがいくつも眠っている。
巡礼・美術工業・職人という3つのモデルルートにまとめたので、
工芸にまつわる散策に是非出掛けてみてほしい。

工芸祭スタンプラリー

工芸タイムトラベルで紹介した金沢市内の工芸ゆかりのスポットから約10箇所に工芸祭オリジナル提灯を設置して紹介します。全スポットを巡った方には、オリジナル手ぬぐいをプレゼント！



まずは「月心寺」へ。裏千家茶道の祖・仙叟宗室の墓があり現在も月釜が行われている。足を伸ばし、宗和流の祖・金森宗和菩提寺「高巖寺」や島田佳矣デザインの「大屋惣あつ」の碑、前田家菩提寺で俵屋宗達の石碑もある「宝円寺」も見逃さない。最後は南西進み「野田墓地」頂上にある加賀藩主前田家墓所にて、彼らの生涯と業績に思いを馳せよう。

歴史と信仰の巡礼ルート

「明治記念之標」は高岡の鋳物職人により造られたとされ、工芸が導入された当時の気配が想像できる。職人の手で修復された工芸は、「尾山神社拝殿」や「北方心泉記念館」、「石黒商店」で見ることができる。少し足を伸ばし、明治から続く窯元「九谷光仙窯」では陶芸体験も可能（要予約）。また非公開放だが「大西陶磁器顔料跡」も重要な産業遺産の一つ。

職人の営みルート

加賀藩の工芸技術を支えた御細工所は「新丸広場」にあったという。歩いて程近い「成業閣」でその技術を感じることができる。工業として窯業を考えた、藩営「春日山窯跡」や維新後の「金沢区方開拓所跡」にも思いを馳せよう。そして現在も続く「石川県立工業高校」や「金沢卯辰山工芸工房」は非公開放だが工芸を支えてきた政治・教育機関として外せない。

文化政策と美術工業ルート





① 春日山窯跡

1807年に青木木米が卯辰山の春日山(現在の小坂神社付近)で始めた窯。加賀藩は殖産政策の一つとして窯業を始めたが、1820年廃窯。現在は看板のみ。
金沢市山の上町10-13

② 月心寺

山ノ上町にある曹洞宗のお寺。裏千家の祖である仙叟宗室や大樋長左衛門代々の墓などがあり、仙叟命日である23日には茶道隆茗会による追善茶会が開催される。
金沢市山の上町1-43

③ 金沢卯辰山工芸工房

金沢の伝統工芸の継承発展と文化振興を目的とし1989年に設立された研修施設。全国から集まった研修者は陶芸、漆芸、染、金工、ガラスのいずれかの工房に在籍。
金沢市卯辰山ト10

④ 新丸広場(御細工所跡)

御細工所は1687年、加賀藩4代藩主前田綱紀により制度化。技術の錬磨に励んだ職人が所属し、生活は保障された。宝暦の大火前は金沢城の新丸広場に設置されていた。
金沢市丸の内1

⑤ 尾山神社拝殿

歴代藩主の別邸であった旧金谷御殿から移築されたもので天井は格天井作り、各間毎に極彩色のうだげの花が美しく描かれる。山本清芳堂により修繕された。
金沢市尾山町11-1

⑥ 明治記念之標(日本武尊銅像)

1880年建立の兼六園にある日本で最初の西洋式銅像。西洋的なモニュメントでありながら、高岡の鋳物職人たちによって鑄造されたため、仏像的な造形感覚が前面に感じられる。
金沢市兼六町1-24

⑦ 成巽閣

加賀藩13代藩主前田斉泰が1863年に母のために建てた大名建築。建立時は1500坪で、一つの棟に武家書院様式と数寄屋風書院造りの2つの様式が組み込まれている。
金沢市兼六町1-2

⑧ 金澤神社 大屋愷あつの碑

大正時代に工芸の“産業化”と“意匠”を監督した島田佳矢によるデザイン。地図製作をした洋学者大屋愷あつの石碑であり、地球儀を大屋の干支の猪が支えている斬新な意匠が特徴。
金沢市兼六町1-3

⑨ 宝円寺

宝町にある曹洞宗のお寺。前田利家が建立し、藩主一族の位牌が安置される菩提寺。江戸初期の画家・俵屋宗達も葬られ、金沢宗達会による茶会が年一度開催されている。
金沢市宝町6-14

⑩ 金沢区方開拓所跡(知事公舎)

1872年、明治維新により困窮した人々の救済のため、現在の知事公舎のある場所に金沢区方開拓所(後の区方勸業場)が開設。製陶部門を中心に授産事業が行われた。
金沢市広坂1-8-2

⑪ 里見町 APARTMENT

タマチストリートと柿木島をつなぐ裏通りにある、1970sの雰囲気残る古ビルでまだ工事中ノスケルトン状態。金沢みらい茶会のEXHIBITION 1の展示会場。
金沢市里見町42-9

⑫ A.SPACE

加賀指物木工師 青木小波が運営する株式会社。金沢が生む人・工芸・モノを世界に紹介。作家もののオーダーメイドの他、ものづくりに必要な道具制作や修繕も行う。
金沢市大工町33-2

⑬ 県立工業高校

1887年、前身の金沢区工業学校が石川県勸業博物館(成巽閣隣)の一部を校舎に設立。初代校長納富次郎は美術工業の発展に努めた。1958年県立工業高校に改称、通常非公開。
金沢市本多町2-3-6

⑭ 中村記念美術館 旧中村邸

1928年に酒造業中村家の住宅として旧元車町で建築。現在地に移築・改装後、平成元年まで中村記念美術館本館として使用。金沢みらい茶会のEXHIBITION2の展示会場。
金沢市本多町3-2-29

⑮ 九谷光仙窯

1872年開窯の九谷焼の窯元。1920年に金沢市野町に移転築窯。現在でもろくろによる成形から上絵付まで職人が一貫して行い、薪窯で焼成を行っている。
金沢市野町5-3-3

⑯ 大西陶磁器顔料跡

金沢市で最後となった陶磁器用の顔料工場。1917年に創業し2018年までの100年余りにわたり顔料を製造し、九谷焼の窯元や中京圏で販売していた。
金沢市久安6-194

⑰ 野田墓地

先人が眠る金沢市営墓地。山頂近くに加賀藩主前田家墓所がある。藩主とその正室の墓は四角形の土壇(どだん)を階段状に重ねており、一見すると古墳に見える。
金沢市野田町墓地

⑱ 金沢アートグミ

金沢市青草町88番地

⑲ 石黒商店

金沢市十間町33

⑳ 浅田屋

金沢市十間町23

㉑ 金城楼

金沢市橋場町2-2-23

㉒ 山本清芳堂

金沢市大手町10-24

㉓ 大友楼

金沢市尾山町2-27

㉔ つば基

金沢市寺町5-1-8

参考文献

- 「加賀の茶道」著者…牧孝治
発行…株式会社北国出版社 1983/4/1
- 「石川県の工芸―江戸時代から現代まで―」
編集発行…石川県立美術館
1991/10/10
- 「千利休居士四百周年遠忘うめかおる その二」
出版…社団法人茶道裏千家淡交会石川支部
1990/9
- 「開館10周年記念特別展 石川の美術―明治・大正・昭和の歩み―」編集発行…石川県立美術館
1994/1/4
- 「近代数寄者の地域的展開―関西・中京・金沢―」
著者…齋藤康彦 2009
- 「MTMJ 日本らしさと茶道」
著者…クリステン・スーラック
発行…さいはて社 2018/4/10
- 「北國文華 第80号(2019夏)特集…茶都金沢の底力」出版…北國新聞社出版局
2019/6/1
- 「現代に息づく茶道のまち 金沢の茶室」
企画発行…金沢市 2002/3/30
- 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院
学位申請論文「クラフト創造都市」金沢に関する
研究…「工芸」の多義性を基軸として」
著者…澤田拳志 2020/3/25
- 「お点前の研究…茶の湯44流派の比較と分析」
著者…廣田吉崇 発行…大隈書店
2020/6/13
- 「別冊太陽スペシャル工芸王国 金沢・能登・加賀への旅」出版…株式会社平凡社
2021/10/24
- 「加賀藩御細工所の研究(一)」
著者…金沢美術工芸大学美術工芸研究所
発行…金沢美術工芸大学 1989/11
- 「茶室空間入門」
著者…船越徹・熊倉功夫・中村利則・西和夫
発行…株式会社彰国社 1992/9/10
- 「石川・富山の近代茶道―入札会と数寄者―」
発行…金沢美術青年会 2005/10/7
- 「日本(工芸)の近代」著者…森仁史
発行…吉川弘文館 2008/12/1
- 「THE BOOK OF TEA 茶の本」
著者…オカクラカクゾウ 発行…パベルプレス
2010/3/25
- 「茶と室内デザイン」編者…小泉和子
発行…株式会社思文閣出版 2015/6/10

金沢21世紀工芸祭2021

土に紐づく…工芸のポリティクス

発行日 2021年11月23日

発行 金沢21世紀工芸祭実行委員会

金沢市下本多町6番丁40-1

金沢市

企画 上田陽子(金沢アートケミ)

編集 金沢21世紀工芸祭実行委員会

取材協力 金沢芽生会、金谷亜祐美、宮越文美

出版協力 石川県立美術館、石川県立工業高校

石川県立歴史博物館、尾山神社

金沢卯辰山工芸工房、成翼閣

表紙イラスト イジャクノ絨毯

本文中イラスト 佐直麻里子(茶花イラスト)

西川圭祐(数寄者・流派所作イラスト)

chisako tabuchi(ルートイラスト)

デザイン 神子澤知弓

印刷 株式会社山田写真製版所

令和3年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業



文化庁